

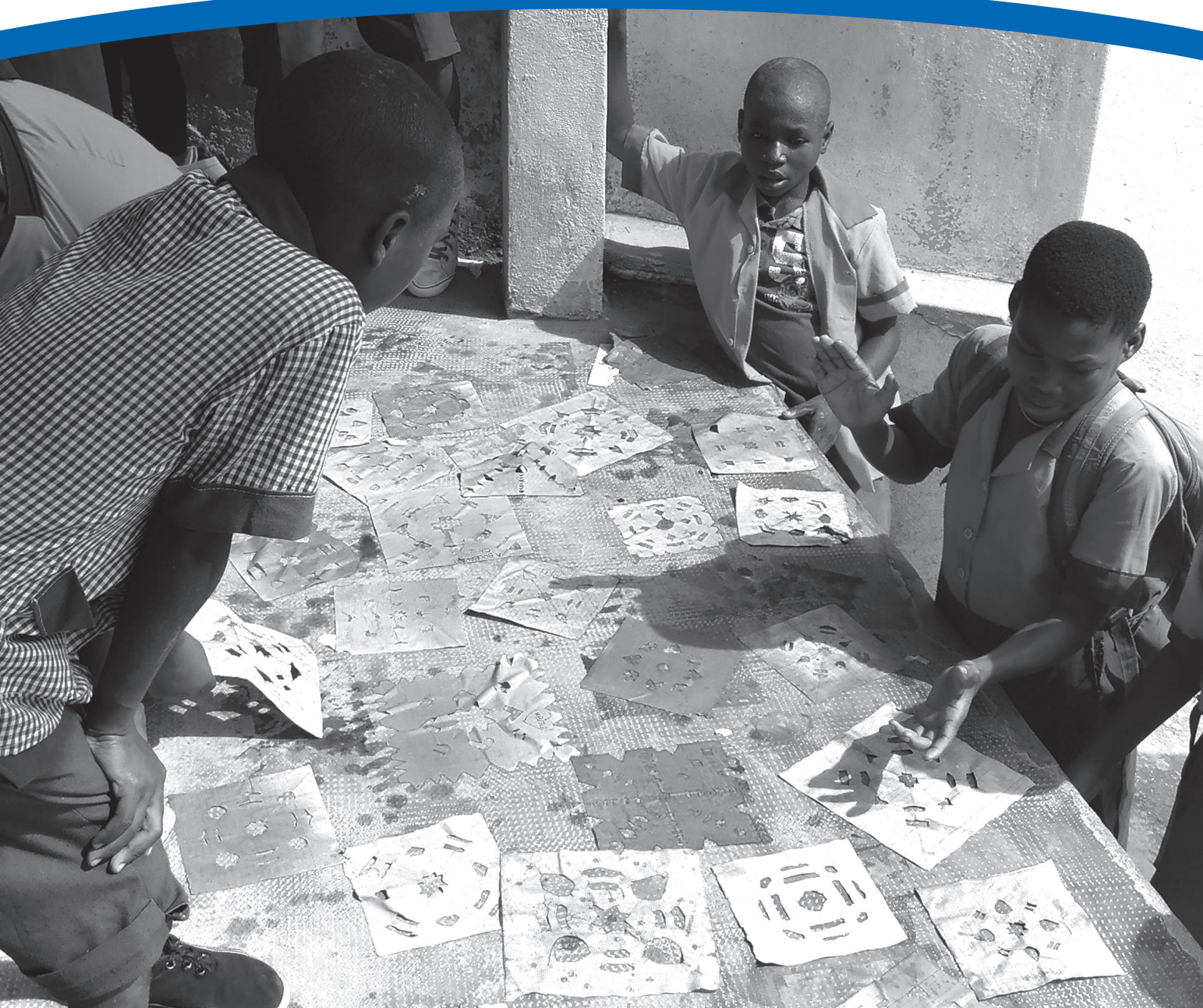
クロスロード



特集

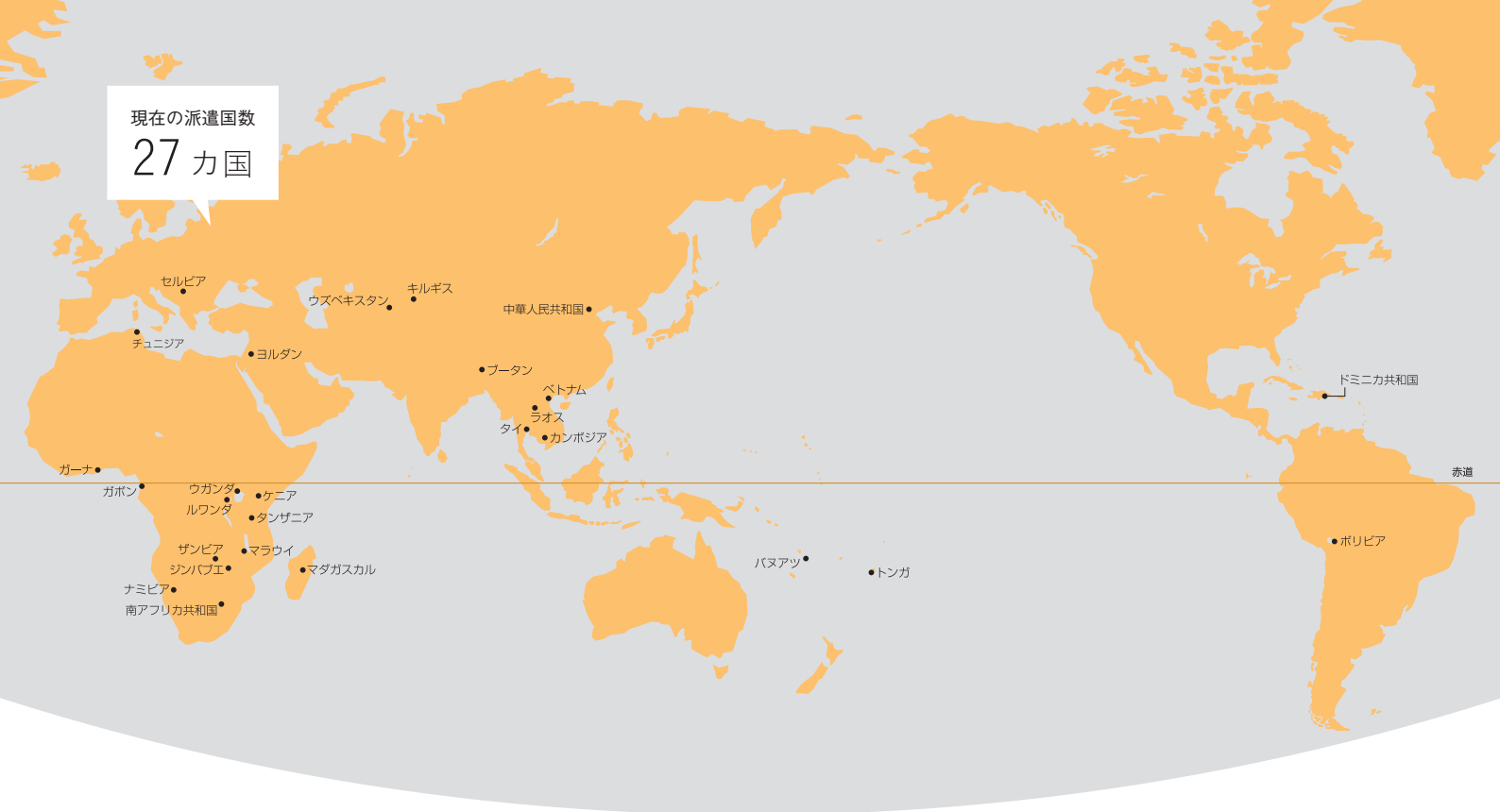
学校教育分野の活動ポイント

派遣国の横顔 ～キルギス～



現在の派遣国数

27カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2021年6月末現在、単位：人)

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	5	
ガーナ	10	
ガボン	5	1
ケニア	8	
ザンビア	3	1
ジンバブエ	5	
タンザニア	1	
ナミビア	1	
マダガスカル	1	
マラウイ	3	
南アフリカ共和国	1	
ルワンダ	11	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
ウズベキスタン	2	
カンボジア	8	
キルギス	2	
タイ	1	
中華人民共和国	3	
ブータン	1	
ベトナム	2	
ラオス	11	2

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
トンガ	1	
バヌアツ	1	

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	2	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
チュニジア	1	
ヨルダン	3	

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ドミニカ共和国	9		3	
ボリビア	1			

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	102 (51/51)	4 (2/2)	3 (2/1)	0	109 (55/54)
累計 (男性/女性)	45,816 (24,323/21,493)	6,556 (5,300/1,256)	1,542 (597/945)	547 (252/295)	54,461 (30,472/23,989)

一般＝青年海外協力隊/海外協力隊

シニア＝シニア海外協力隊

日系一般＝日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2021 AUG.

Contents

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	26
村落開発普及員	35
青少年活動	6
野球	30、32
体育	14
小学校教育	10、12、16、36
考古学	20
美容師	21
家政・生活改善	36
日系日本語学校教師	24
作業療法士	18
理学療法士	8

■国別索引	掲載ページ
ウガンダ	14
エジプト	4
カメルーン	16、36
カンボジア	12
キルギス	6、8
グアテマラ	10
ザンビア	36
タイ	30
チリ	18
ネパール	35
ブラジル	24
ブルキナファソ	32
モンゴル	21
ラオス	4、20

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	32
茨城県	21
埼玉県	12、20
千葉県	29
東京都	6、14、24
新潟県	18、28
岐阜県	30
愛知県	10、16
大阪府	8

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2021年度1次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：(株)AND

レイアウト：(株)AND

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

JICA Volunteers' Reports

- ▶一時帰国中の協力隊員たちと制作した「遊びを通じた学び」アイデア集が完成（日本）
- ▶派遣国ラオスの布を使った洋服や雑貨を製造・販売する事業を開始（日本）

派遣国の横顔 ～キルギス～

6

人的資源

大塚 圭さん（青少年活動・2018年度1次隊）

8

保健・医療

古川雅一さん（理学療法士・2017年度1次隊）

特集

学校教育分野の活動ポイント

10

算数

市川あかねさん（グアテマラ・小学校教育・2018年度1次隊）

12

理科

猪股史子さん（カンボジア・小学校教育・2018年度1次隊）

14

体育

網代健人さん（ウガンダ・体育・2018年度1次隊）

16

図工

飛田梨圭さん（カメルーン・小学校教育・2018年度1次隊）

18

“失敗”から学ぶ

後藤麻衣子さん（チリ・作業療法士・2017年度2次隊）

20

希少職種図鑑

- ▶考古学 川島秀義さん（シニア海外協力隊員／ラオス・2016年度2次隊）
- ▶美容師 相馬 円さん（モンゴル・2017年度2次隊）

22

JICA海外協力隊的プチテクガイド

マーケティング入門／「折り紙ピアス」のつくり方

24

JICA Volunteers' Before ▶ After ～人生を変えた2年間～

オンライン学習塾の代表
石森和磨さん（日系社会青年ボランティア／ブラジル・日系日本語学校教師・2015年度派遣）

26

帰国後よもやま話

コミュニティ開発隊員篇

28

Pick Up OB・OG会

- ▶新潟県青年海外協力協会
- ▶千葉県JICAシニアボランティアの会

30

先輩隊員のシューカツ記

十勝バス株式会社 社員 近藤 薫さん（タイ・野球・2017年度2次隊）

32

JOCV SPORTS NEWS

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「寄り道」

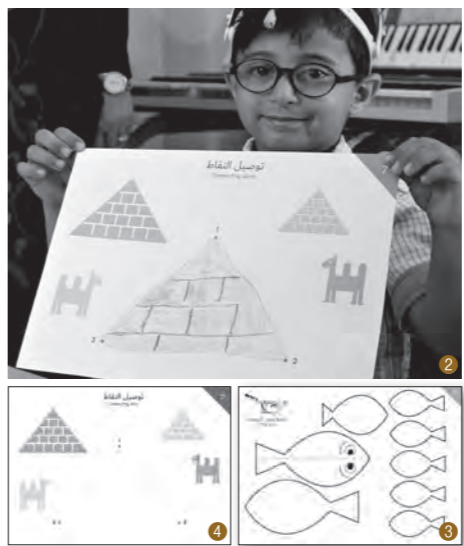
35

INFORMATION

36

隊員めし

ザンビアのおもてなし料理「鶏肉のトマト煮」



①教材を使って魚釣り遊びをするエジプトの子どもたち ②作品を手にしてハイポーズ ③魚釣り遊びのワークシート
④「点」を結んで絵を描くワークシート

制作の流れ		
2020年	10月	一時帰国中の協力隊員有志と神谷さんと制作チームを結成し、企画の検討を開始
	1月	ワークシート、英語・アラビア語の解説書の作成を開始
2021年	4月	完成
	5月	ウェブサイト(QRコード)で公開開始
	6月中旬	エジプトの保育園で活用開始
	6月下旬	活用方法に関するワークショップを実施

一時帰国中の協力隊員たちと制作した「遊びを通した学び」アイデア集が完成

文= 神谷哲郎 (JICA「エジプト就学前教育と保育の質向上プロジェクト」チーフアドバイザー／ヨルダン・美術・1991年度1次隊)

Japan

「遊びを通した学び」により保育の質を高めることを目指すプロジェクトに携わっている私は、コロナ禍により2020年4月に一時帰国。時を同じくして、世界中に派遣されていた協力隊員たちも一斉に一時帰国する事態となりました。

7月になり、エジプトの保育園・幼稚園は部分開園できるようになりましたが、園児たちの活動は「密」にならないものに制限されていました。そうした状況でどのような支援ができるかを考えるなか、「一時帰国した協力隊員たちと塗り絵の教材をつくるのができないか」と思い立ちました。青年海外協力隊事務局の協力を得て声をかけたところ、幼児教育隊員と美術隊員の計8人が手を挙げてくれました。派遣国はアフリカ、アジア、中南米、中東とさまざまです。

制作チームを結成したのは20年10月。オンラインの初顔合わせでは、メンバーたちから「派遣国とつながってほしい」「今できることは何なのか?」「同じ志の人と協働できることがうれしい」といった思いが語られました。

それから12月まで、この取り組みで何を伝えるのか、具体的にどのような形に仕上げるのかなどについてオンラインミーティングで検討を重ねました。「コロナ禍の中だからこそ、子どもたちに楽しく遊んでもらいたい。そのためにも、単なる塗り絵ではなく、子どもたちの想像力や創造力を豊かに育むアイデアを詰めこもう」と、メンバーの考えがまとまりました。

制作開始は21年1月。オンラインの打ち合わせを重ねながら、幼児教育隊員は子どもたちの成長段階、興味・関心を踏まえたアイデアを出し、美術隊員はアイデアを具体的な形にしていきました。そうして12の遊びのアイデアをまとめた「Create Your Joy」が完成したのは4月です。

このアイデア集を世界中の子どもたちに紹介し、幼児教育の現場や家庭で使ってもらえるよう、「Create Your Joy」のワークシートのデータは私が携わっている技術協力プロジェクトのウェブサイトで公開し、自由にダウンロードして使ってもらいたい旨を明記しました。また、英語版とアラビア語版の保育者向け解説書、および各アイデアについて紹介する動画も作成し、QRコードを付けて公開しました。

コロナ禍の中、接点がなかった一時帰国中の協力隊員同士がオンラインでのやり取りをとおしてつくり上げたこの企画は、新しい国際協力のあり方、派遣国の違いを超えて協働する方法を考える示唆に富む取り組みとなったのではないかと感じています。

世界中の子どもたちに笑顔になってもらいたいというメンバーたちの思いをしっかりと受け止め、今後はまず、エジプトで私自身がこのアイデア集を普及していく予定です。



事業概要	
名称	siimee
発足	2021年3月
代表者	梅谷菜穂 (ラオス・コミュニティ開発・2017年度3次隊)
事業	ラオスの布を使った洋服・雑貨の輸入、製造、販売
連絡先	siimee.colors@gmail.com
ウェブサイト	



上:「纏うラオス展」で販売したsiimeeの製品
左: siimeeで取り扱う布の生産者(左)と梅谷さん

派遣国ラオスの布を使った洋服や雑貨を製造・販売する事業を開始

文= 梅谷菜穂 (siimee代表／ラオス・コミュニティ開発・2017年度3次隊)

Japan

2021年3月、「siimee」というブランドを立ち上げ、協力隊時代の派遣国であるラオスの布を使った洋服や雑貨を製造・販売する事業を始めました。

きっかけは、協力隊時代に同国で美しい天然素材と手仕事でつくられる布に出合ったことです。私はボリカムサイ県で特産品の開発・販路拡大の支援に携わりました。そのなかで、糸の手紡ぎ、布の手織り、布の草木染めという現地の伝統文化に出会いました。つくり手だった女性は私の着任当時、手間やコストがかかることから伝統の継承をやめてしまっていたのですが、「今の時代だからこそ、手仕事に価値がある」ということを伝えたいところ、彼女は伝統の復興をしたいという思いが湧き、それを再開しました。出来上がった布は、草木染めの色合いが繊細で美しく、手紡ぎ・手織りの布の柔らかさにラオスの伝統模様加わり、とても美しいものでした。

「これをぜひ日本にも伝えたい」と強く思い、雑貨だけでなく、洋服としても商品化しようと考えました。体にまとうことで天然素材や手仕事の良さを体感してもらえ、より多くの人にその魅力が広まるのではないかと考えたからです。日本の市場に合った服をつくるため、帰国後、夜間の服飾専門学校に通いました。

そして21年3月、協力隊員としてラオスで私と同様の活動をしてきた現在の夫、加藤友章(ラオス・コミュニティ開発・2018年度1次隊)と共に本事業を始めると決まりました。

現在、雑貨については現地でつくられた製品を仕入れ、洋服については布を仕入れて私がデザインから縫製までを行い、展示会やオンラインショップで販売しています。デザインには、ラオスの自然や文化から得た着想を取り入れています。

最初の販売機会は、21年4月に広島県尾道市で開催した展示会「纏うラオス展」でした。これはラオス隊員のOGである花岡早織さん(ラオス・PCインストラクター! 2017年度1次隊)から誘われて実現したもので、NPO法人「Support for Women's Happiness」を含む三者の合同開催でした。siimeeの雑貨や洋服を見ていただいたお客様からは、布の優しい色合いや服のデザインについてお褒めの言葉をいただきました。

siimeeは協力隊時代に一緒に活動した生産者から製品や布を直接仕入れているため、フェアな取引ができる点が事業の特長の1つです。生産体制や販売経路がまだ安定していませんので、より多くのお客様に製品を届け、生産者に継続的に注文ができるサイクルをつくっていくことが現在の課題です。将来的には、すべての製造をラオスで行い、「Made in Laos」の良質な製品を届けることができるようにしたいと思っています。

ブランド名のsiimeeは、ラオス語で「母の色」という意味です。そんな美しく柔らかい色合いを持つラオスの布を、より多くの方々に見ていただけるよう、これからも励んでいきたいと思えます。



派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。



Field 1 人的資源



おつか けい
大塚 圭さん
(青少年活動・2018年度1次隊)

PROFILE
1980年生まれ、東京都出身。米国の大学院修士課程を修了した後、2005年より中央大学杉並高等学校に外国語科(英語)の専任教員として勤務。2018年7月、青年海外協力隊員としてキルギスに赴任(現職参加)。20年3月に帰国し、復職。

活動概要
ビシュケク市教育局に配属され、小中高一貫校で行われている英語教育に関する主に以下の活動に従事。
●教員を対象としたワークショップの実施
●パイロット校の教員への継続的な技術指導
●教員用教材の作成

小中高一貫校の英語授業への ペアワークやグループワーク の導入を支援

市の教育行政を所管する機関に配属された大塚さん。初等中等教育における英語教育でコミュニケーションの能力を養うことが重視されつつあったなか、その手法の紹介に取り組んだ。

大塚さんが配属されたのは、キルギスの首都ビシュケク市の教育行政を所管する市教育局。初等中等教育で行われている英語教育の質向上を支援することが、求められていた活動だった。

英語教育の充実化

同国がソ連から独立したのは1991年。キルギス語が国家語だが、現在もロシア語が公用語とされている。そうしたなか、グローバル化の進展を受けて政府が力を入れてるのは、初等中等教育での英語教育の充実化

だ。同国で初等中等教育が行われているのは、全11学年の小中高一貫校。1〜4年生が初等教育(小学校に相当)、5〜9年生が前期中等教育(中学校に相当)、10〜11年生が後期中等教育(高等学校に相当)となっている。英語授業がカリキュラムに組み込まれているのは3〜11年生。学年ごとに週2〜5コマ数が定められており、かならずクラスの児童・生徒を分けて20人以下の少人数で授業をしなければならぬことになっている。授業を担当するのは、英語科専任の教員だ。



パイロット校の教員とチームティーチングで行った英語授業でのペアワーク

着任の時点で改訂が完了していたのは、3〜6年生の教科書。ソ連時代から使われてきた改訂前の教科書は、英語の長文を中心としており、翻訳して文法を学んでいく授業に合ったものだ。一方、改訂後の教科書は、児童・生徒が1対1で英語を使った会話を、「ペアワーク」や、3人以上で英語を使った会話を「グループワーク」などを取り入れる授業に合ったもので、内容は英語の会話例が中心。英語によるコミュニケーション能力の育成を重視するという政府の方針にもとづいた改訂である。

全校でのワークショップから開始

大塚さんの配属先が管轄する小中高一貫校は97校。配属先は年に1回、管轄校の評価を行うために各校を回っており、大塚さんが着任してまもなくそれが実施されることに

なった。英語教育の現状を知るチャンスだと考えた大塚さんは、同行させてもらって授業を見学。教員たちは積極的に英語で児童・生徒に話しかけてはいるものの、その相手は英語の得意な一部の児童・生徒に限られており、改訂版の教科書がある学年でもペアワークやグループワーク(以下、ペア・グループワーク)を取り入れてはなかった。国内に教職課程を持つ大学はなく、英語教員たちは英語教育の専門性を身につけずに教職に就いた人たち。配属先は月に1回、彼らのスキルアップを図るための研修を開いていたが、そこではまだペア・グループワークの指導がなされていなかった。そこで大塚さんは、ペア・グループワークが授業に導入されることを目標に据え、それに向けて以下の3つの活動に取り組んだ。

1 各校でのワークショップの開催

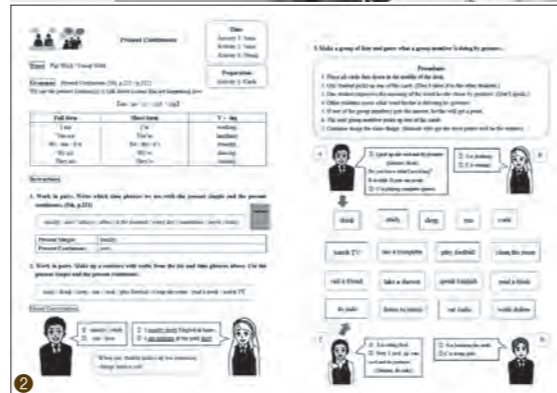
任期の前半、英語教育が行われていない特

別支援学校を除く管轄校97校のすべてで、それぞれ1回ずつ、英語教員たちにペア・グループワークのやり方を伝える1時間半ほどのワークショップを行った。ワークショップの前半は、日本の英語授業の映像なども使いつつ、ペア・グループワークの意義や実施のコツなど概要を説明。後半は、教員たち自身に児童・生徒の立場になってペア・グループワークを体験してもらった。

にペア・グループワークの技術の習得に意欲的な英語教員がいた学校だ。
3 教員用教材の作成
パイロット校での指導を始めたのと同時に、教科書を補う教員用教材の作成を開始した。教科書に掲載されていないペア・グループワークのやり方のアイデアを、「be動詞」など教科書で扱われている文法項目ごとに紹介するものだ。イラストはキルギスの美術隊員に依頼。任期終了までの半年ほどで約100ページの教材が完成した。

2 パイロット校での継続的指導
ワークショップを97校で行った後は、市内の4地域で「パイロット校」を1校ずつ選び、それぞれ週に1回のペースで継続して訪問。大塚さんが単独で英語授業をやってみせたり、英語教員とチームティーチングをしたりしながら、「どこの場面です」という声かけをするか」など、ペア・グループワークの細かな技術を彼らに伝えていった。大塚さんの帰国後、地域でペア・グループワークの技術向上を先導する役割を果たしてもらえようかな学校をつくってみたいとの考えから取り組んだ活動であり、パイロット校に選んだのは、各校でワークショップを行った際

ワークショップを97校で行った後は、市内の4地域で「パイロット校」を1校ずつ選び、それぞれ週に1回のペースで継続して訪問。大塚さんが単独で英語授業をやってみせたり、英語教員とチームティーチングをしたりしながら、「どこの場面です」という声かけをするか」など、ペア・グループワークの細かな技術を彼らに伝えていった。大塚さんの帰国後、地域でペア・グループワークの技術向上を先導する役割を果たしてもらえようかな学校をつくってみたいとの考えから取り組んだ活動であり、パイロット校に選んだのは、各校でワークショップを行った際



1 任期前半に各校を回って行った英語教員対象のワークショップ
2 大塚さんが自作した、ペア・グループワークのアイデアを紹介する教員用教材

派遣国の横顔

任地ひとロメモ <チュイ州ビシュケク市>



ビシュケク市は人口約100万人の首都。写真は、ソ連時代の1984年に街の中心につくられたアラトー広場。国立歴史博物館などが隣接する観光の名所だ



右:キルギス最大の市場、オシュバザール
左:「ナン」と呼ばれるキルギスで一般的な円盤型のパン



ふるかわまさかず
古川雅一さん
(理学療法士・2017年度1次隊)

PROFILE
1986年生まれ、大阪府出身。専門学校で理学療法士の免許を取得した後、病院の理学療法士、理学療法士養成校の教員を経て、2017年7月に青年海外協力隊員としてキルギスに赴任。19年7月に帰国。

活動概要
キルギス国立リハビリテーションセンター(チュイ州アラムディン県タシュドボ村)に配属され、リハビリに関する主以下の活動に従事。
●患者へのリハビリの実施
●同僚を対象とするセミナーの開催

リハビリの中枢施設で 重症度に応じた訓練や リスク管理の方法を紹介

キルギスにおけるリハビリの中枢施設となっている病院に配属された古川さん。十分な専門教育を受けていないリハビリ部門の同僚たちに、セミナーなどを通じて基礎的な技術を紹介していった。

古川さんが配属されたのは、首都ビシュケクの郊外にある国立の総合病院。キルギスにおけるリハビリの中枢施設になっており、他の医療施設でリハビリを処方された患者の入院・通院も受け入れている。病床数は510床。求められていたのは、リハビリ部門の技術の向上を支援することだった。

リスクの高い訓練

同国には「理学療法士」や「作業療法士」の国家資格がない。理学療法は療法「こと」異なる担当が存在していた。物理療法は専任の看護師が担当。運動療法と治療マッサージは、数週間の研修を受けた「運動指導員」と「マッサージ師」がそれぞれ担当していた。一方、上肢の訓練は同じく数週間の研修を受けた「トゥルドセラペフト(ロシア語で作業療法士を意味する)」と呼ばれる人々が担当していた。

養成校や国家資格などでリハビリ従事者を養成する仕組みがまだ整っていないことから、古川さんの配属先もリハビリの中枢施設でありながら、サービスの質には課題が多かった。例えば運動指導員やトゥルドセラペフトは、数週間の研修を受けた「運動指導員」と「マッサージ師」がそれぞれ担当していた。一方、上肢の訓練は同じく数週間の研修を受けた「トゥルドセラペフト(ロシア語で作業療法士を意味する)」と呼ばれる人々が担当していた。

自主訓練の指導を徹底

配属先でリハビリを受ける患者の疾患で多かったのは脳卒中後遺症、脊髄損傷後遺症、小児脳性麻痺など。古川さんは、これらの疾患に対する動作訓練の中心となる運動指導員とトゥルドセラペフトへの技術支援をメインに行うことにした。

古川さんの着任当時、配属先には5人の運動指導員と2人のトゥルドセラペフトが配

セミナーで伝えたことは、その後、同僚たちによってリハビリに取り入れられ、さらに新人スタッフや研修生への指導でも言及してもらえるようになった。特に変化が顕著だったのはトゥルドセラペフトの1人。脳卒中後遺症により手指に麻痺がある患者に対し、以前はすべての患者に同じ方法で関節を動かして拘縮を予防する訓練だけを実施していたが、重症度に合わせた物品操作の訓練などを取り入れるようになった。

配属先では、病床数に限りがあることから、リハビリを受ける患者の入院期間は16日間までと決められていた。その期間のリハビリで、脳卒中後遺症や脊髄損傷後遺症者の運動機能が大きく改善することは難しい場合が多い。そのため、患者やその家族に退院後の自主訓練を促すことが重要だったが、当初はその認識が同僚たちにはなかった。そこで古川さんは、退院前に自宅の環境を患者に

確認し、そのなかでできる自主訓練を紹介するよう、セミナーなどで伝えるようにした。

自主訓練を促すことがキルギスでは特に有効であると古川さん自身が知ったのは、任期が後半に入ったころだ。脊髄損傷で当初は座ることもできなかった患者が、数カ月ごとに配属先を訪れるたびに症状が良くなっていったことがあった。尋ねると、自宅に毎日友人たちが入れ替わりやってきて、古川さんが指導した自主訓練のサポートをしてくれたとのことだった。古川さんは派遣前に訪問リハビリに携わった経験もあったが、そうした家族を超えた「助け合い」の例には出会ったことがなかった。その患者の変化に驚いた配属先のリハビリ医は、運動指導員やトゥルドセラペフトに自主訓練を促すよう指示。以後、自主訓練について患者に伝達される機会は増加した。

派遣国の横顔

置かれていた。彼らへの技術支援は2本柱で進めた。1つは、共に患者へのリハビリにあたりながら、適宜有益と思われる訓練内容を共有していくこと。午前中はトゥルドセラペフトたちと共に、午後は運動指導員たちと共にリハビリを行うというルーチンをつくった。

共にリハビリにあたりながらの訓練内容の伝達には当初、「語学力」の壁があった。キルギスの医療現場で使われる専門用語はロシア語。一方、古川さんが派遣前訓練で学んだのはキルギス語だ。そのため、勧めたい訓練方法があっても、その医学的根拠をその場で説明することができなかった。運動指導員のなかにはキルギス語を話すことができないロシア人スタッフも2人おり、彼らとのコミュニケーションはとりわけ難しかった。そうしたことから、当初は共にリハビリにあ

たる際、勧めたい訓練の方法を自らなるべく多く実践し、見て知ってもらうよう努めた。技術支援のもう一つの柱は、セミナーの開催だ。共にリハビリにあたるなかで把握した同僚たちの課題の解決に資するようなテーマを選びながら、数カ月1度のペースで開いていった。語学力不足によってその場では説明することができなかった「医学的根拠」については、現地のロシア語教師の協力を得ながら、事前に時間をかけてロシア語の教材を作成し、それを使いながら説明した。セミナーでは、実際に患者の訓練を行っている様子を記録した写真や動画も活用。扱った題材は、疾患ごとのリハビリについての総論、人体構造、重症度に応じた訓練の仕方などさまざまなだったが、特に重点を置いたのは、「前述の起立性低血圧症の例に見られるような「リスク」の管理の仕方」を伝えることだ。



①患者に自ら訓練を行う古川さん
②同僚たちを対象とするセミナーでは、事前に時間をかけてつくったロシア語の教材を活用
③トゥルドセラペフトが実践するようになった物品操作の訓練



古川さん(右端)が運動指導員とトゥルドセラペフトを対象に開いたセミナーの様子

任地ひとロメモ 〈チュイ州アラムディン県タシュドボ村〉



タシュドボ村は、首都ビシュケクからバスで30分ほどの郊外にある村



右:キルギスの伝統楽器「コムズ」を手にする古川さん(左)
左:キルギスの食事は多くの料理が並べられ、取り分けて食べていくスタイルだ

学校教育分野の活動ポイント

CASE1 算数

いちかわ
市川あかねさんの事例
(グアテマラ・小学校教育・2018年度1次隊)



PROFILE

1991年生まれ、愛知県出身。大学で小学校の教員免許状を取得した後、一般企業に就職して4年間勤務。2018年6月、青年海外協力隊員としてグアテマラに赴任。20年3月に一時帰国し、同年6月に任期終了。

協力隊活動

キチエ県教育事務所に配属され、算数科の国定教科書『グアテマティカ』とその教員用指導書の配布や活用の促進に従事。

グアテマラの学校教育

【学校体系】

- 就学前教育：4～6歳児が対象
- 初等教育（義務教育）：6年間
- 前期中等教育（義務教育）：3年間（普通課程）
- 後期中等教育：2～3年間（普通課程）
- 高等教育：4～6年間（学士課程）

【年度開始】

1月（2学期制）

市川さんの流儀

「現地教員の『評価』は控える」

現地教員とかかわるなかで次第にわかってきたのは、協力隊員が「あなたの授業はここが課題です」と彼らの能力を評価するようなことをするのはタブーだということです。威圧的に感じられたり、彼らのプライドを傷つけてしまったりする可能性があるからです。あくまで対等な関係であることを示す必要があると思います。そのため私は、教員の能力も公になってしまう学力テストには一切関与せず、授業観察での個別の指導も「こういうやり方もある」などアイデアの提供でとどめるよう努めました。

市川さんの配属先は、グアテマラ教育省が地方出先機関としてキチエ県に置く県教育事務所。県の教育行政を担う機関だ。配属先の分所の1つ、同県ネバフ市の1学区を所管する学区長事務所が所属先となった。約30の公立小学校がある学区で、カウンタートパート（以下、C.P.）となったのは学区長である。市川さんに求められていたのは、2007年に算数科の国定教科書となったものの、任地ではまだその活用が進んでいなかった『グアテマティカ』の活用促進を支援することだった。

『グアテマティカ』は日本の技術協力を受けて

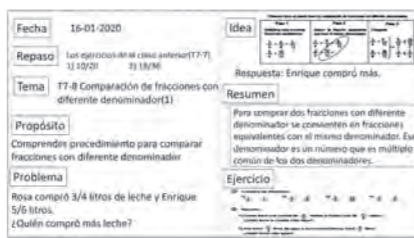
指導書の配布を後押し

市川さんは、所属する学区長事務所初めて派遣された協力隊員。着任するとまずは任地の算数教育の現状を知るため、モデル校とされていた数校をC.P.と回り、授業を見学させてもらった。すると、いずれの学校でも『グアテマティカ』とその指導書は配布されておらず、以前の国定教科書を使うなどしながら授業が行われていた。顕著だったのは、教員間の指導力の差だ。子どもの理解度に合わせながら指導している教員がいる一方、冒頭に練習問題を板書し、それを解かせるだけの授業をしている教員もいた。学級担任制であり、算数が苦手な教員も授業をしなければならぬために、そのような事態になっていることが推測された。

市川さんは、『グアテマティカ』を各校に行き渡らせることこそ、「教員間の指導力に差がある」という問題を解決するために有効な手段だと考えた。指導書があれば、算数が苦手な教員も一定レベルの授業を展開することが可能になるはずだからだ。そこで市川さんは、モデル校の全教員にせめて指導書が配布されるよう手を打ってもらえないかとC.P.に打診。教科書が児童に行き渡らなくても、指導書さえあれば教員が教科書の内容に沿った授業を進めることができるかと考えたからである。市川さんの考えに賛同したC.P.と共にネバフ市役所に交渉したところ、指導書を白黒でコピーして綴じたものを必要な部数印刷する費用を負担してくれることになった。着任して半年ほど経った時期である。指導書のコピー版がモデル校の教員に行き渡ると、市川さんはその活用方法を伝える活動に着手。最初に行ったのは、各モデル校で全教員を対象とする指導書導入のための講習会を開く

教科書の教員用指導書の活用促進を通じて、算数授業の質向上を支援

教育行政機関の地方出先機関に配属された市川さん。現地教員の算数指導力にはらつきがあったなか、教員用指導書の活用を促すことで、教員の指導力の底上げを図った。



日付	考え方
復習	まとめ
単元名	練習問題
目的	
問題	

① 現地教員を対象とする講習会で「図形」の指導方法を伝える市川さん ② 現地教員に指導書の使い方直接伝える市川さん ③ 『グアテマティカ』(右)とその指導書のコピー版 ④ 板書の要領を伝えるために使った講習会のプレゼン資料

ことだ。その後、各モデル校を日替わりで巡回しながら、授業観察とその場でのアドバイス、教員に見てもらいながら市川さん自身が授業を実践すること、その学校の全教員を対象にさらにスキルアップのための講習会を実施することなどを重ね、『グアテマティカ』に対する教員たちの理解を促していった。各モデル校で講習会を開くペースはおおむね月に1度ずつ。教員たちの参加を義務づける文書をC.P.から校長宛てに発出してもらい、さらに参加した教員の記録を事後に提出するよう求めてもらったことで、毎回、ほぼすべての教員が参加してくれた。

「板書」に特化した指導

『グアテマティカ』には、以前の国定教科書にないような長所があるのかをある程度理解してもらえたと感じた市川さんは、着任の約1年後、モデル校の巡回で「板書の方法」に重点を置いて教員たちへの指導を行うようになった。板書は、指導書で解説されている授業の内容を整理して伝える、言わば最後の「フィルタ」。教員たちが板書の要領を身につければ、同時に彼らが指導書の内容を整理して把握することにつながるだろうと考えたからだ。

市川さんは、どの単元でも使えるような板書の「ひな型」をつくり、講習会で伝えていった。黒板を左右2つに分け、左部分の上から下、さらに右部分の上から下へと、授業展開の時系列の順に項目を置くような構成だ。項目は「日付」「復習」「単元名」「今回の授業の目的」「題材とする問題」「問題を解くための考え方」「まとめ」「練習問題」の8つ。指導書の内容もこうした授業展開の時系列の順に解説が書かれているため、それをコンパクトにまとめて記載していけば、おのずとわかりやすい板書に仕上がる。講習会では、指導書の内容をどのようにこのひな型に置き換えていくのか、その要領を指導した。以上のような取り組みの成果が見えはじめたのは、任期の終盤に入ったころだ。市川さんが着任した当時、練習問題を板書して解かせるだけの授業をしていた教員は、市川さんが紹介したひな型を使いながら板書をし、「導入」「展開」「まとめ」に分割化された授業をするまでに変化。彼女を含め、市川さんの任期終了時まで、モデル校の約8割の教員が指導書を活用した授業を行うようになっていた。

その後猪股さんは、実験や観察のやり方の紹介に着手。視覚教材をつくる際、配属先に紙の提供をお願いしたが、「予算が足りない」と断られていた。そこで猪股さんは、無料で手に入る廃材や、商店などで安く手に入るものを実験・観察の器具や材料に活用することにしました。例えば、商店で安く手に入れた木の棒に水を入れた

廃材を使った実験・観察

18年度が始まると、猪股さんは2校の教員とチームティーチングを行いながら、作成した視覚教材の使い方を彼らに紹介。視覚教材はファイルにまとめて両校に提供した。すると、それを授業で活用する教員がすぐさま現れ、猪股さんの任期終了まで活用が途絶えることはなかった。

17年度が終わると、18年度が始まるまでの間に猪股さんは視覚教材の作成に取り組んだ。視覚教材の活用は実験の実施よりも難しくないため、まずは教員たちにその方法を紹介しようと考えたからだ。猪股さんは日本での教職経験を通じて、小学生相手の授業は「参加」の要素を充実させて「リズム」を生むことが重要だと考えを持っていった。そのため、作成した視覚教材も、単に説明の補助とするだけのものではなく、アクティビティに使えるものにした。例えば、雄しべや雌しべなど花の部位を示す単語を書いたカードを、花の絵の適切な位置に貼っていく教材などである。

実験や観察の器具や材料を教員が自前で用意しなければならぬことが、そうした事態の要因の1つであると考えられたが、それ以前に大半の教員は理科の教え方の引き出し自体を持っていない様子だった。

州にあった公立小学校は72校。カウンタートリート（以下、CPT）となった初等教育課の副課長のリクエストにより、そのうちの2校が任期を通じて猪股さんの活動場所となった。かつて協力隊員が体育授業や図工授業の支援をしたことがある学校だった。1校は町の中心部にある小学校。40人ほどのクラスが各学年に4、5クラスずつある大規模校だった。もう1校は、町の中心部から離れた場所にある小学校で、20人

授業を参加型にするための視覚教材

猪股さんが配属されたのは、カンボジア教育青年スポーツ省の地方出先機関の1つであるプレアシハヌーク州教育青年スポーツ局。州の教育行政を所管する機関で、初等教育課の所属となった猪股さんに求められていたのは、小学校の理科授業の質向上を支援することだった。

**CASE2
理科**

いのまたあやこ
猪股史子さん(写真右)の事例
(カンボジア・小学校教育・2018年度1次隊)



PROFILE

1982年生まれ、埼玉県出身。大学で小学校の教員免許状を取得。自然体験プログラムを提供する団体に1年半勤務した後、教員として小学校に10年間勤務。2018年7月、青年海外協力隊員としてカンボジアに赴任(現職参加)。20年3月に帰国し、復職。

協力隊活動

プレアシハヌーク州教育青年スポーツ局(シハヌークビル市)に配属され、理科教育に関する主に以下の活動に従事。

- 視覚教材の活用促進
- 実験・観察の導入促進

カンボジアの学校教育

【学校体系】

- 就学前教育：3～5歳児が対象
- 初等教育(義務教育)：6年間
- 前期中等教育(義務教育)：3年間
- 後期中等教育：3年間
- 高等教育：4～8年間(学士課程)

【年度開始】

10月(2学期制)

猪股さんの流儀

「授業のリズムを大切に」

日本での教職経験から、小学生相手の授業で大切なのは「リズムがあって楽しいこと」と私は考えています。そのリズムを生み出すためには、児童が「参加」する要素を豊富に取り入れることが必要です。協力隊時代、児童に「参加」する機会をつくる視覚教材や実験・観察を取り入れることで、彼らの授業への興味が増えました。そういう姿を見て、「リズム」の大切さは国を超えて当てはまることなのだと思います。

**チームティーチングで
視覚教材と実験・観察の
理科授業への導入を支援**

州レベルの教育行政機関に配属された猪股さん。教科書を読み上げるだけの理科授業が多かったなか、自作の視覚教材の活用や、廃材などを活用した器具で行う実験・観察の導入を支援した。



①「てこの原理」の実験を行う猪股さん ②猪股さんが作成した視覚教材をまとめたファイル ③猪股さんが作成した「花の部位」を学ぶ視覚教材で授業を行う現地の教員 ④商店で購入した定規などを使って猪股さんが自作した天秤ばかり ⑤育てているインゲン豆を観察する児童たち

ペットボトルをぶら下げ、「てこの原理」を知る実験の器具をつくった。土に水分が含まれていることを知る実験では、土を入れた缶の上にガラスをかざし、教員が持っていたカセットコンロで熱してガラスに水蒸気が付くようにしたが、缶とガラスはいつでも外で拾ったものを使った。

実験や観察のやり方もチームティーチングで教員たちに伝えていったが、視覚教材のときは勝手が違った。器具や材料は猪股さんが準備し、彼らの負担を増やさないようにしたもの、授業で実験や観察をやる段になると猪股さんに任せきりなることが続いたのだ。そうした教員は苦手意識が強いのだろうと思われたが、それを払拭してもらうためには、チームティーチングを行う回数を増やし、こまめなフォローを重ねなければならぬと猪股さんは考えた。そこで着任の約1年後に始まった19年度からは、同じ教員とチームティーチングを行う回数を増やすため、やるべき実験や観察の数が多く、4、5年生に活動対象の学年を絞り込むことにした。

対象の絞り込みに伴い、継続したフォローが必要な実験・観察を授業に取り入れるようになった。例えば、異なる水やりの量でインゲン豆を育てることを児童に実践させ、水やりには適量があることを学ばせる実験だ。この実験への児童の興味は強く、彼らは水やりをしっかりと継続。猪股さんの訪問日には「芽が出たよ」などと報告してくれた。すると、そうした光景を見たことで活動対象の教員たちの態度も変化した。「こうした経験をさせることは大事だと思ふ」などと言って、実験・観察を行うチームティーチングに主体的にかかわってくれるようになったのだ。任期の残りが3カ月ほどとなった時期である。

ほとどのクラスが各学年に1つずつある小規模校だった。

同国の小学校では各校が国定教科書を児童に貸し出す仕組みとなっている。理科の教科書では実験も扱われているが、CPTとの話し合いにより、特にその量が多くなる4～6年生の授業を猪股さんが支援することになった。

猪股さんが着任したのは、2017年度の終わりまで残り1カ月となった時期。手始めに行ったのは、2校で授業を見学させてもらうことだ。学級担任制がとられ、すべての教員が理科授業を行っていたが、大半は教科書を読み上げ、そのまま板書することに終始。多くのクラスで教科書が全児童に行き渡っていなかったため、教科書の板書も必要ではあったが、それに加えて児童の理解を促すような視覚教材を活用している例はなかった。実験や観察を行っていた教員はただ1人。両校にはいずれも理科室がなく、

「かならず出席する」「途中で抜け出さない」という、「授業」として当たり前状態をつくるのが先決だと考えた網代さんは、以下のような方法を試みた。

■**テストの導入** 対象が主要教科に限られていた学期末のテストに、体育を組み込むよう配属先に依頼。生徒数が多いため、実技試験の実施は難しかったが、授業で扱った種目のルールなどを出題する筆記試験の時間を設けてもらえるようになった。

■**出席簿の導入** 授業の開始時に集まった生徒には、出席した証となるカードを配布。授業の途中でトイレに行く場合はカードを預けさせ、戻ってきたら返すという仕組みとした。そうして、授業の最後にカードを持っている生徒、すなわち「最初から最後までいた生徒」だけ出席簿に記録することにした。

■**成績づけの導入** 配属先が生徒1人1人に出す成績表に、体育の項目を追加するよう依頼

CPがメインとなる授業も

休業状態だった体育授業を網代さんが単独で再開することになったが、その最初の授業で大きくつまづいた。英語版にアレンジしたラジオ体操を冒頭に行っけがの予防を図った後、縦一列に並んだ生徒たちが「頭の上」「脇」「股下」など変化をつけながら後ろの生徒にボールを渡していくアクティビティを実施。ところが、ラジオ体操を始めてしばらく経ったところから、生徒たちが授業を抜け出し始め、80分間の授業の終了時に校庭に残っていたのはわずか6人だった。以後、いずれのクラスも状況は同様で、出席率が1割程度というような状態が続いてしまった。

2011年にウガンダ教育・スポーツ省が中等教育学校での体育授業を必修化するなど、同国では近年、体育教育の充実化が図られている。そうした流れの一環として、同省は32の中等教育学校を「体育・スポーツ推進校」に指定。ボールなどの道具を重点的に配布し、体育授業やスポーツの部活動の活性化を目指している。網代さんが配属されたのは、そうした体育・スポーツ推進校の1つだ。各種球技のボールやハードルなど、体育授業を実践するために必要な最低限の道具が配布され、各クラスで体育授業が週に1コマ、時間割に組み込まれていた。

CASE3
体育

あじろけん と
網代健人さんの事例
(ウガンダ・体育・2018年度1次隊)



PROFILE

1995年生まれ、東京都出身。日本大学文理学部体育学科で中・高等学校の教員免許状(体育科)を取得した後、2018年7月に青年海外協力隊員としてウガンダに赴任。20年3月に一時帰国し、同年7月に任期を終了。

協力隊活動

セベイ・テグレス中高等学校(カブチョルワ県)に配属され、主に以下の活動に従事。
●体育授業の質向上支援
●野球部の運営・指導

ウガンダの学校教育

【学校体系】

- 就学前教育：2～5歳児が対象
- 初等教育(義務教育)：7年間
- 前期中等教育：4年間(普通課程)
- 後期中等教育：2年間(普通課程)
- 高等教育：3～5年間(学士課程)

【年度開始】

2月(3学期制)

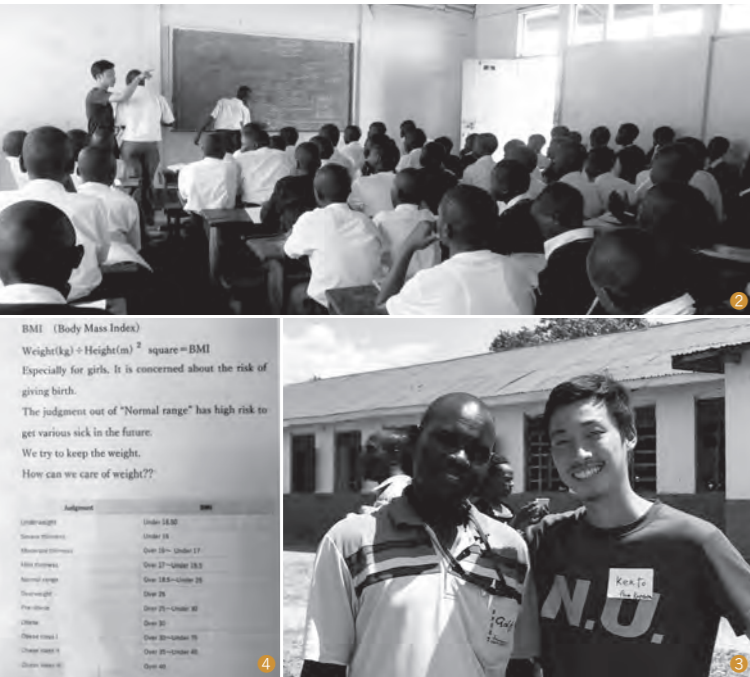
網代さんの流儀

「準備運動は十分に」

体育授業の冒頭で準備運動をすることは、けがの予防のために不可欠ですが、私は長めの時間を準備運動に充てました。同国では、しっかりと体育授業を受けることができるのは、一部の子どもに限られています。そうしたなか、私の授業で準備運動のやり方を知った子どもたちが、体育授業を受けることができない兄弟姉妹、あるいは受けたことがない両親にそれを伝えてくれれば、多くの人の健康増進につながると考えたからです。

体育は「遊び」ではない
と認識させるため
テストや出席簿を導入

中等教育学校に配属され、体育授業の質向上支援に取り組んだ網代さん。「体育授業は遊びの時間」と認識されていたなか、テストの導入などにより、「授業」としての形を整えていった。



1 体育授業の冒頭の準備運動 2 網代さんは保健の座学も取り入れ、雨の日などに行った 3 網代さんとCP 4 保健の座学で紹介したBMIの求め方の教材

出席を促す取り組み

体育・スポーツ推進校とは言え、名ばかりだった。教科担任制がとられていたが、体育担当の男女2人の教員は他教科との兼任。自身が体育授業を受けた経験はなく、体育授業に関する知識は大学の座学で得たものだけだった。さらに、同国では前期中等教育を終える4年次と後期中等教育を終える6年次には進級を左右する国家試験があったが、その出題範囲に体育はなかった。そうした事情から、「体育授業は遊びの時間」との認識が教員にも生徒にもあった。

網代さんは体育担当の教員とチームティーチングを行い、体育授業の技術を伝えるはずだったが、着任時にはその予定が白紙になっていた。カウンターパート(以下、CP)の男性教員は、けがにより、他方の女性教員は出産により、休職をしている最中だったからだ。そのため開店し、実現させた。期末テストと出席数の配点を1対1として、体育の成績づけをするようにした。

以上のような「外的な動機づけ」の工夫により、生徒の出席率は徐々に上昇。そこで網代さんは、生徒たちが授業の中心に興味を持つような「内的な動機づけ」の工夫に力を入れるようになった。冒頭の準備運動ではやはりラジオ体操を行ったが、生徒たちに不評だったため、ペアで行うストレッチなど、彼らが興味を持つような動作を組み込むなどアレンジしていった。メインのアクティビティについては、同じ種目を行う回数は5、6回にとどめ、配属先にある道具でできる種目をできるだけ多く体験してもらうようにした。

CPが復帰したのは、網代さんが着任して1年ほど経ったところだ。当初、チームティーチングを行おうと誘うものの、無断で休まれることが多かった。ところが、体育教育について学ぶ日本での2週間の研修に参加したことで、彼らにわかに変化した。復帰の約1カ月後だ。日本の体育授業が衝撃的だったようで、帰国すると「女子児童が積極的に動いていたので驚いた」「しっかりと体育授業を行えば、『肥満が多い』というウガンダの問題が解決するはずだ」と、次々に感想を吐露。その後、授業に欠かさず参加するようになり、「テストがあるのだから、しっかり説明を聞かなければだめだ。これは授業なのだ」と生徒に声をかけるようになった。さらに復帰して3カ月ほど経ったころには、網代さんがメインで授業を行った後、それを参考にしなが、CPがメインとなって、同じ学年のほかのクラスで同じ内容の授業を行うという流れが確立した。

ちぎったりして準備することはできた。そうして「折り紙」の指導などはできたが、教科書に載っている「貼り絵」や「切り絵」などは、糊や絵の具、色紙、はさみなどが必要となる。それらの購入を学校に求めたが、難しいとの返事だった。そこで飛田さんは、無料もしくは安価で手に入る物で代用する方法を考え、実践。糊については、児童たちにそれぞれ小麦粉を少量ずつ持参してもらい、水と混ぜて手づくりした。紙に色を付けるために利用したのは、現地でよく売られているハイビスカスジュースの材料に使われていた花だ。青紫色の染料になることを知り、かつ安価なので教員たちに自費で購入してもらった。可能だと考えられたため、まずは飛田さんが自費で購入して授業で使ってみせた。はさみはやむを得ず飛田さんが自費で購入し、各校の備品として使ってもらったことにした。

飛田さんが授業を行ったクラスの担任教員のなかには、はさみの使い方を知らない人もいた。そうした教員に使い方を伝えて練習してもらった。腕前が上達するのを楽しみ感じたようであり積極的に授業に関与してくれるようになった。その様子から、教員たちが図工授業の実践に消極的だったのは、彼らの苦手意識が大きな原因だったのだろうと考え、以後、授業を行うクラスの担任教員には、なるべく児童と一緒に制作に取り組んでもらい、「切る」「貼る」「塗る」といった作業への自信を持ってもらうよう努めた。そうして任期が2年目に入ると、1年目に飛田さんとの授業で扱った制作課題の指導を、単独の授業で実践する教員も出てきた。

環境教育と図工教育の合わせ技

思いがけず、任地で広く図工授業をPRする

CASE4

図工

とびたりか
飛田梨圭さんの事例
(カメルーン・小学校教育・2018年度1次隊)



PROFILE

1990年生まれ、愛知県出身。大学で小学校の教員免許状を取得した後、教員として小学校に3年間勤務。退職後の2018年6月に青年海外協力隊員としてカメルーンに赴任。20年3月に一時帰国し、同年6月に任期終了。

協力隊活動

ンバムイヌブ県初等教育事務所(中央州)に配属され、主に以下の活動に従事。
●配属先が管轄する小学校での図工の授業の質向上支援
●教員養成校での図工に関する指導

カメルーンの学校教育

【学校体系】

- 就学前教育：4～5歳児が対象
- 初等教育：6年間(義務教育)
- 前期中等教育：4年間(普通課程)
- 後期中等教育：2年間(普通課程)
- 高等教育：3～6年間(学士課程)

【年度開始】

9月(3学期制)

飛田さんの流儀

「ものづくりの楽しさ」を知ってもらう

人間は多様です。主要教科は不得意だけれども、ものづくりは得意だという子もいます。そういう子どもがものづくりの楽しさに目覚める機会をつくることこそ、図工授業の重要な意義であり、そういう目覚めを促す図工授業を現地の教員に実践してもらいたいとの思いで、私は活動に取り組みました。そして、教員たちの実践を促すには、教員たち自身にもものづくりの楽しさに目覚めてもらうことが必要だというのが、活動を通して実感したことです。

現地で調達可能な物で
実践できる図工授業の
アイデアを紹介

小学校を巡回して図工授業の質向上支援に取り組んだ飛田さん。材料や道具を用意する予算が学校にないなか、無料もしくは安価で手に入る物を活用する方法を紹介していった。



1 図工授業で制作した、壁に貼る大きな貼り絵。児童たちの夢とクラスのスローガンを表現してもらった
2 紙を染めるために使った花びら
3 児童たちに好評だった七夕の網飾りの制作で、教員たちに提供した制作手順のマニュアル。作成したマニュアルはすべてまとめて巡回先に残してきた
4 子どもの日のイベントに向けて制作した日本の国旗のモザイク画
5 子どもの日のイベントに向けて制作した猿の像
6 子どもの日のイベントで制作したモザイク画を掲げてパレードする児童たち

工教育が組み込まれており、学習指導要領や教科書もあった。巡回先では各クラスで週に1、2コマ図工授業があり、学級担任がそれを実施することになっていた。しかし飛田さんの着任時、巡回先で授業を継続的に行っている教員は少なく、行っている教員も内容が「絵画」に偏っていた。そうした事態にはいくつかの原因があると考えられた。卒業資格を認定する国家試験で出題範囲に含まれていないこと、教員自身が図工授業を受けた経験がないため、授業の要領がわからないこと、道具や材料を学校に用意してもらおうのが予算上難しいことなどだ。

飛田さんは、教科書で「工作」の扱が多い5、6年生を対象を絞り、各クラスの担任教員と共に図工授業を行いながら、工作の指導の仕方を伝えていくことにした。課題はやはり、材料や道具をどう調達するかという点だった。「白い紙」は児童が持参したり、ノートのページを

機会になったのは、着任して半年ほど経った時期に授業で行った「廃材を使ったアート」の制作だ。カメルーンで「子どもの日」という祝日になっている2月8日には、毎年、各学校の児童・生徒たちがパレードをするイベントが開かれていた。町にポイ捨てされているゴミが多いことが気になっていた飛田さんは、共に図工授業を行っている教員の1人に、環境問題の啓発を目的に児童たちでゴミ拾いをして、図工授業で児童たちに拾った廃材を使ったアートの共同制作をさせ、それを掲げてパレードさせてみようという提案。この機会を利用して、環境問題の啓発と図工授業の活性化の両方を狙う取り組みで、同国のアーティストの活動を参考にしたアイデアだった。

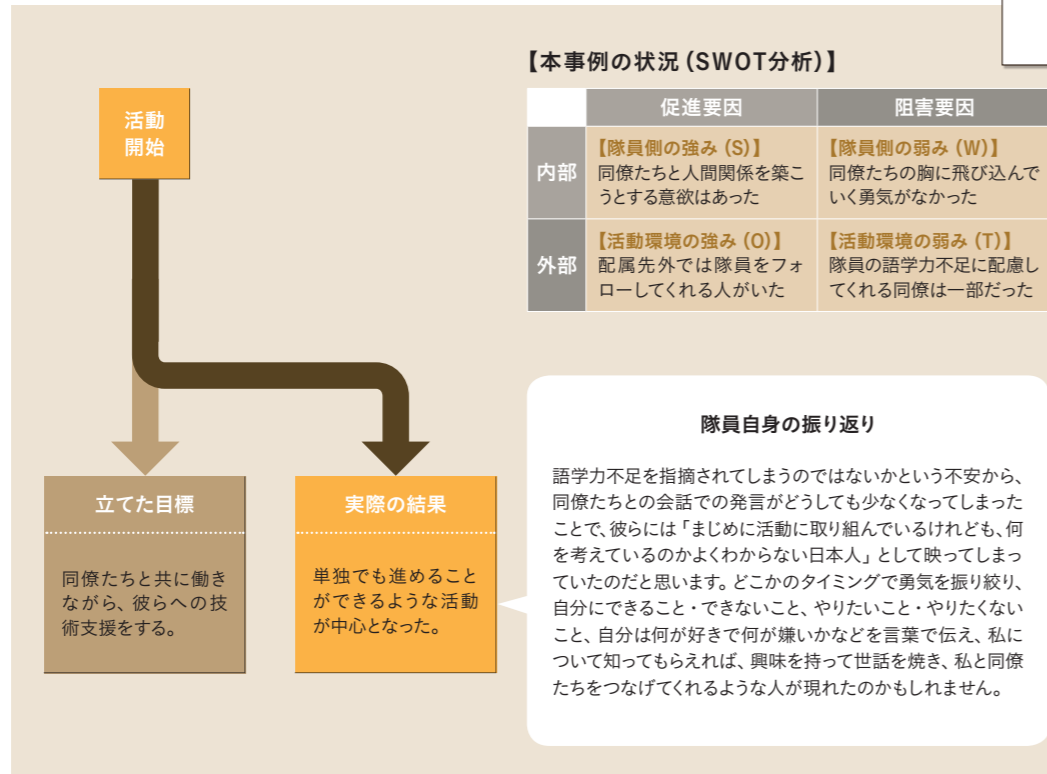
制作を行うことになったのは、巡回先の学校の5年生と6年生の1クラスずつ。5年生のクラスではペットボトルでつくる猿の像、6年生のクラスではビール瓶の王冠をベニヤ板に打ち付けてつくる国旗のモザイク画をつくった。イベントの3カ月前に制作を開始し、当日までには完成。猿の像は持ち運ぶと壊れる可能性が高いことから、パレードに持ち込むことは断念したが、モザイク画は重いながらも児童が交代で掲げながら行進した。

任地の一大イベントであるため、パレードは多くの住民が参観。すると、モザイク画を見た飛田さんの巡回先以外の小学校の教員から、「うちの学校でもあれのつくり方を指導してほしい」とのリクエストが舞い込んできた。「廃材を使ったアート」は図工授業の活性化の起爆剤になると感じたことから、以後の授業ではそれを多く扱おうと考えたが、コロナ禍による一時帰国のため、その実現は叶わなかった。

“失敗”から学ぶ #193



事例整理



他隊員の分析

「何でも教わろう」という姿勢を

同僚たちに語学力について前任者と比べられるという経験は私にもあります。そのときに語学力の低さをあらためて実感させられましたが、すぐに改善できることではないため、言葉も含め、仕事のやり方や生活、文化や宗教などさまざまなことを同僚たちから教わることから始めようと決めました。すると、会話はおぼつかなくても次第に彼らとの距離は縮まり、互いを知り合うことができました。そうして、彼らが私に何を求めているのか、配属先での私の役目は何かを見出すことができ、活動を軌道に乗せることができました。着任当初は会話についていけない怖さは避けられませんが、ほんの少しの勇気で活路は開けると思います。

文＝協力隊経験者

- アジア・理学療法士・2018年度派遣
- 活動概要：県病院に配属され、同僚への技術支援に従事。

まずは冗談を

私が派遣されたのは、何代にもわたって協力隊員が派遣されてきた病院だったため、多くの同僚たちから過去の協力隊員の話が聞かれ、ときに比較もされました。私も着任時の語学力はきわめて低かったのですが、ちょっとした冗談が言えると「楽しく話ができる相手」と見られ、たとえ語学力が低くても労を惜しまず会話に応じてもらえました。また、語学力の低さなどに構うことなく付き合ってくれるような人が見つければ、語学力が足りない時期を乗り切ることができそうです。私は配属先以外のコミュニティでそういう友人が見つかり、彼との付き合いで語学力が伸び、自信を得ることができました。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・薬剤師・2017年度派遣
- 活動概要：県病院に配属され、院内薬局の業務支援などに従事。

着任早々に語学力不足を指摘され 発言を控えるようになってしまった

話 II 後藤麻衣子さん (チリ・作業療法士・2017年度2次隊)

私は、他職種の隊員が派遣されたことのある一次医療機関に配属された。作業療法士と理学療法士が数人ずつ配置されていたリハビリ部門で技術支援をするというのが要請内容だった。

派遣前訓練と現地語学訓練では、現地で使われているスペイン語を学んだ。現地語学訓練のときまでは、スペイン語の力が伸びていくことを楽しく感じていた。着任時も、語学力不足におびえなくて積極的にコミュニケーションをとっていった。着任後、休憩時間に同僚たちが集まっている場で、まだ初対面に近かった同僚から「このスペイン語は知っている？」などと、下ネタを含めてあれこれ語句の知識を問われた。それらは私が知らない語句ばかりだった。すると、「前任の協力隊員とは違って、あなたはスペイン語が全然できないのね」と言われてしまった。

軽口で言われたことだとわかっていった。しかし、着任直後の緊張している時期だったことから、私のショックは大きく、以後、同僚たちと会話することに怖

気づいてしまった。同僚に食事に誘われ、断らないようにするなど、プライベートで人間関係をつくろうとは努めた。しかし、語学力不足を指摘されてしまうのではないかと自信のなさから、どうしても口数は少なくなってしまった。カウンターパートに「辛いときには、食事などに誘われても断って大丈夫だよ」と言われ、同僚からの食事の誘いを断つたこともあった。

人間関係が出来ていない状態では、同僚たちにリハビリの技術的なアドバイスをするのは難しかった。そうしたなか、自分の専門性を生かすことができる役割を模索して見つけた活動は、配属先がやらなければならないけれども手薄になっていた訪問リハビリを担うこと。単独での活動だった。

着任して半年ほど経つと、旅行先でスペイン語が達者なことに驚かれ、語学力の上達を実感して自信が湧く機会はあった。しかし、任地に戻って活動を再開すると、また臆病さが戻ってしまった。そうした状態は任期が終わるまで続き、同僚たちに技術を伝えることは十分にはできなかった。



料理の作業による集団療法を行う後藤さん



PROFILE

1984年生まれ、新潟県出身。千葉県医療技術大学校を卒業後、作業療法士として総合病院、介護老人保健施設、訪問看護ステーションに勤務。2017年10月に青年海外協力隊員としてチリに赴任。19年10月に帰国。

活動概要

- ラス・カブラス診療所(オイギンス県ラス・カブラス市)に配属され、主に以下の活動に従事。
- 外来リハビリや訪問リハビリの支援
- 同僚を対象とするリハビリ技術のワークショップの開催

派遣人数は少ないものの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#G234

美容師

派遣中 ▶ 1人

累計 ▶ 63人

分類 ▶ 人的資源

活動例 ▶ 美容師育成・指導教員育成のための技術指導など

類似職種 ▶ —

※人数は2021年6月末現在。



配属先の授業でパーマの技術を指導する相馬さん

#G209

考古学

派遣中 ▶ 1人

累計 ▶ 107人

分類 ▶ 人的資源

活動例 ▶ 考古学の授業や教員への助言、発掘調査の技術指導など

類似職種 ▶ 学芸員、文化財保護

※人数は2021年6月末現在。



川島さんの帰国にあたり、ラオス国立大学の考古学教育を支援するプロジェクトの代表と関係者が集まって行われたハンドオーバーセレモニー

PROFILE

1979年生まれ、茨城県出身。美容学校を卒業後、美容師として美容院に勤務。2017年10月、青年海外協力隊員としてモンゴルに赴任。19年10月に帰国。

活動概要

トブ県職業訓練校(トブ県ゾーンモド市)に配属され、主に以下の活動に従事。

- 同僚教員への美容技術(応用技術)の指導
- 美容技術の教科書の作成
- 日本の美容技術に関する授業の導入支援



相馬 円 さん
(モンゴル・2017年度2次隊)

PROFILE

1975年生まれ、埼玉県出身。東海大学文学部史学科(考古学専攻)を卒業後、2000年4月に青年海外協力隊員としてラオスに赴任(考古学・1999年度3次隊)。財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団勤務等を経て、16年10月にシニア海外協力隊員としてラオスに赴任。18年10月に帰国。

活動概要

ビエンチャン市にあるラオス国立大学社会科学部歴史・考古学科に配属され、主に以下の活動に従事。

- 講師を対象とする考古学の指導
- 考古学調査(遺跡踏査など)への参加
- 遺跡の調査への参加
- 配属先の紀要の刊行



川島 秀義 さん
(シニア海外協力隊員/
ラオス・2016年度2次隊)

Q メインの活動は?

私が配属されたラオス国立大学社会科学部歴史・考古学科の考古学・文化遺産保護専攻は開設されたばかりだったため、歴史学や人類学を指導してきた講師数人が考古学の指導を担っていました。そこで私が取り組んだのは、担当講師たちの考古学に関する知識や技術の向上を支援する活動です。任期の前半から中盤にかけては講師たちを対象に講習会を実施し、中盤から後半にかけては講師たちと共に考古学調査を実践して、そのなかで指導を行いました。その結果、講師たちはある程度のサポートがあれば考古学調査の計画策定、実施、報告ができるようになり、それが学生への指導のレベルアップにもつながりました。

Q 活動での最大の困難は?

考古学・文化遺産保護専攻に十分な予算を割いてもらうのが難しかったことです。講師たちの指導力向上には考古学調査の経験を積むことが必要でしたが、その費用を予算でまかなうのは不可能でした。また、不足していた考古学関連の資料や機器材を整備することも、予算では困難でした。

Q どう対応しましたか?

考古学調査については、ラオスでの考古学調査を予定していた日本のい

Q メインの活動は?

私が配属されたのは、中学校を卒業した人が入学できる職業訓練校の美容コースです。コースにはカウンターパート(以下、CP)となる女性の現地教員がいましたが、彼女は私の着任時、男性カットの技術は非常に優れていたものの、それ以外の技術は知識すら乏しいという状態でした。そのため、授業を共にしたり、勉強会を行ったりして彼女に不足している技術を伝えることが、メインの活動の1つとなりました。

また、配属先には美容技術の教科書がなかったことから、着任後まもなくその作成を開始し、任期終了の直前に製本までたどり着くことができました。その間、単元の一部を小冊子にまとめ、授業で活用していました。日本美容美容教育センターに許可をいただき、同センターが発行する美容実習の教科書をベースにモンゴル語版の教科書を作成しました。

Q 活動での最大の困難は?

美容技術は多種の細かな作業の積み重ねであるため、教科書の作成にあたっては、それらを現地の人に正確に伝えたかったのですが、モンゴル語で表現することは容易ではありませんでした。作成した原稿をCPに見せると、当初は「理解できない」と指摘されてばかりでした。

くつかの大学とラオス国立大学の連携をコーディネートし、調査に配属先の講師たちが参加することができました。そのなかで、調査や報告書作成の経験を積んでもらいました。配属先の講師たちと日本の研究者の間の交流が進み始めたことも、共同調査の収穫でした。また、共同調査の際に日本の大学の研究者から「ラオスの考古学のために何かできることはないか」と申し出があり、ラオス国立大学に対して資料や機器材の整備を支援するプロジェクトを立ち上げてもらうこともできました。私は日本の大学と配属先との仲介役を担当し、任期中に資料や機器材の不足は解消されました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

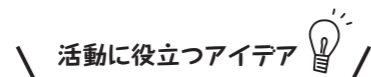
赴任前の方は「2年間」という期間を「長い」と感じるかもしれません。しかし、途上国では計画通りに進まないことが通常であるため、実際に活動を始めると、思い描く目標を達成するには限られた時間だと痛感することになります。そうしたなか、1つでも多くの目標を達成するためには、当初の計画に縛られず、そのときそのときの状況に合わせて計画を修正していく柔軟さが大事だと思います。そして、支援をする側、受ける側の両者がお互いを尊重し、楽しむことが良い成果につながるはずです。

Q どう対応しましたか?

任地にいるモンゴル人の日本語教師を紹介していただき、その方に翻訳のポイントを伺うことで、どのような表現がモンゴル人にわかりづらいのかを理解していきました。その結果、最終的にはCPからも「理解できる」と言ってもらえるような教科書に仕上げることができました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

美容師という職種は職業訓練機関への配属が一般的かと思いますが、資機材が不足しているなど、質の高い授業をするための環境が整っていないケースが多いと思います。私の配属先も、着任当時はウィッグやヘアスチーマーなど美容の基本技術を教えるために必要な物がなく、外部の大学などの支援でそれらを手入して、本格的な授業が行える環境をつくるまでに1年ほどかかってしまいました。しかし、その間にCPや生徒たちとの関係を構築するよう努めたことで、後の活動がスムーズに進んだという実感があります。日本の細やかな美容技術や接客のノウハウは、途上国で重宝されることだと思います。ご自身のこれまでの経験を最大限に生かし、有意義な2年間にするために、最初は焦ることなく、現地の人との人間関係をじっくり育ててください。



「折り紙ピアス」の作り方

ナビゲーター = 細川椎菜さん
(ベルー・青少年活動・2018年度1次隊)

私は協力隊員としてベルーの児童保護施設に配属され、日本文化を体験する講座の運営に取り組みました。受講者が特に興味を持ってくれたのは、折り紙でつくるピアスです。通常サイズの折り紙を16分の1に切り、「鶴」や「手裏剣」などを折ってピアスフックと結合するもので、つくるのは決して容易でないにもかかわらず、受講者は熱心に腕を磨き、配属先の同僚たちは作品をこぞって購入してくれました。女性のおしゃれ心はどの派遣国も共通だと思えます。社会的自立に向けた職業訓練などに取り組む協力隊員には、材料や道具が入手できる環境であれば商材の候補としていただけると感じたことから、ここではその作り方をご紹介します。

【材料と道具】

- ▶折り紙…15cm×15cm(通常サイズ)。模様があるものなら多様な仕上がりの作品をつくることができます。
- ▶ビーズ…直径8mm程度のものが折り紙のサイズに合います。
- ▶ワイヤー…太さ1mm程度のものがつくりやすいです。
- ▶丸カン(上写真) …細めがつくりやすいです。
- ▶ピアスフック
- ▶トップコート(マニキュアをコーティングするもの)
- ▶カッター
- ▶ラジオペンチ(下写真) …2本あるとつくりやすいです。



【制作手順(「折り鶴バージョン」)】

- 1 カッターで折り紙を16分の1(3.75cm×3.75cm)に切る。
- 2 ①で鶴を折る。
- 3 ラジオペンチでワイヤーを3cm程度に切る。
- 4 ③の一方の先端数mmをラジオペンチで直角に折る(写真A)。
- 5 ④の折っていないほうの先端をビーズに通し、さらに②の腹から背へと通す(写真B)。
- 6 ⑤の折っていない先端にラジオペンチで輪をつくる(写真C)。
- 7 ラジオペンチで丸カンの切れ目を開く(写真D)。
- 8 ⑦でつくった切れ目から、⑥の輪とピアスフックの下端の輪を通し、ラジオペンチで丸カンの切れ目を閉じる(写真E)。

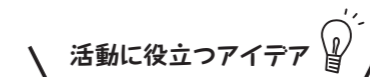
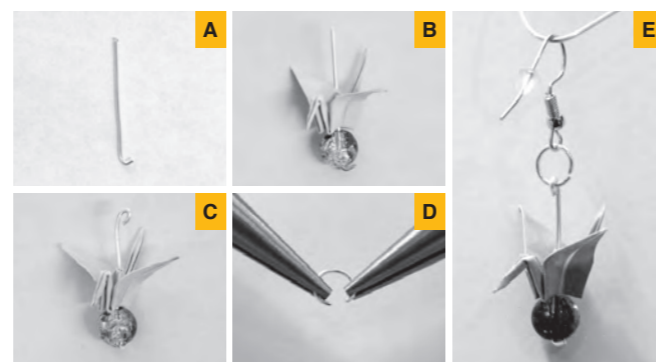
⑨折り紙に強度をもたせるため、表面にトップコートを塗る。

【制作のポイント】

- ▶折り紙の仕上がりを良くするためには、折り紙を切るときの誤差を1mm以内にする必要があります。
- ▶ラジオペンチでワイヤーの先端を折ったり丸めたりする際、全体が歪まないように気をつけてください。
- ▶折り紙は形が容易に崩れるため、トップコートは「塗り過ぎでは」と思うくらいにたつぷりと隅から隅まで塗ってください。

【制作指導のポイント】

- ▶3.75cm×3.75cmの折り紙をきれいに折ることは難しいため、最初は元のサイズの折り紙で折る練習を根気強く繰り返してもらってください。
- ▶「鶴」のピアスは私の配属先の同僚には好評でしたが、折るのは難易度が高いため、折るのがもう少し簡単な「手裏剣」や「兜」などで折る要領を体得してもらおうのが良いと思います。
- ▶ワイヤーの先端を折ったり丸めたりする作業もコツがあるため、それをつかむまで何度も練習してもらう必要があります。
- ▶【制作のポイント】の重要性を理解してもらうためには、ポイントを守った作品と守らなかった作品をつくり、両者の違いを目で見て実感してもらおうことが有効です。
- ▶制作に慣れてきたら、ビーズや丸カンの数を増やすなどしてデザインのバリエーションを増やし、制作者の楽しみを増やしていくのが良いと思います。



マーケティング入門①

ナビゲーター = 東野奈津恵さん
(エルサルバドル・経済・市場調査・2008年度4次隊)

「マーケティング」とは、商品・サービスを売れるようにするため、その価値をいかに高めるかを考える活動全般を指します。価値の高め方はさまざまですが、その対象項目を「4P」と呼ばれる以下の4つに整理することがあります。

対象項目	価値の高め方の例
Product (商品・サービス自体)	想定する消費者が心地良く感じるデザインにする
Price (商品・サービスの価格)	想定する消費者にとって適切な価格を設定する
Promotion (商品・サービスの周知方法)	想定する消費者が利用するSNSに広告を出す
Place (商品・サービスの販売方法)	想定する消費者が日常的に利用する店で販売する

協力隊員のなかには、住民の収入向上に向けて農産加工品や手工芸品などの小規模ビジネスの支援に取り組むケースがあると思います。そうした活動で参考としていただくため、手軽に実践できるマーケティングの方法を2号にわたってご紹介します。

「3C」に目を配る

商品・サービスを売るためには、消費者のニーズに合っていて、かつ競合他社の商品・サービスにはない魅力があることが必要です。そのため、「3C」と呼ばれる「**Company**=自社」「**Customer**=消費者」「**Competitor**=競合相手」に目を配ることが重要です。どのように目を配るか、「Product=商品・サービス自体」の価値の高め方を例に説明します。

【「Company = 自社」への目配り】

「Product=商品・サービス自体」の価値には「機能的価値」と「情緒的価値」があります。機能的価値は「機能」や「品質」の面の価値で、食品なら「おいしい」「健康に良い」などがこれに当たります。情緒的価値は、商品・サービスを利用した消費者に引き起こす感情の面の価値で、食品なら「生産者の情報が商品に添えられているため、安心して食べることができる」などがこれに当たります。「コンセプト」(商品・サービスを表現するキーワード)は、機能的価値と情緒的価値を組み合わせでつくります。

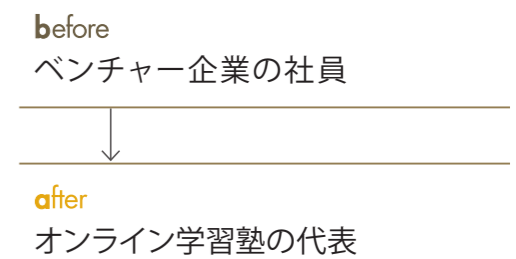
開発する商品・サービスにどのような機能的価値と情緒的価値を付けるかを考える際は、生産者グループなど「Company=自社」について振り返ることが必要です。例えば農産加工品を開発する場合、まずは自分たちの地域の農産物で他の地域ではあまりつくられていないものはないかを検討します。私の協力隊時代の任地は栄養価が高い蜂蜜が採れる蜂がいたことから、「栄養価が高い」という機能的価値がある蜂蜜の生産・販売を行うことにしました。さらに、生産者グループの地域の特徴を検討し、「人里離れた山奥の村」といった特徴があれば、そうした場所でひっそりと暮らしているという生産者の物語を、「消費者の興味をそそる」という情緒的価値にすることができます。

【「Customer = 消費者」への目配り】

開発する商品・サービスにどのような機能的価値と情緒的価値を付けるかを考える際には、「Customer=消費者」のニーズを知ることも必要です。その際に有用なのは、想定する消費者について、「ライフスタイル」や「悩み」など「内面」に関係する属性(「サイコグラフィック」と呼ばれる)を知ることです。例えば、地元の人に「料理に時間がかかるので大変」という話を聞いたら、野菜をただ売るのではなく、「スープに入れる野菜のセット」といった機能的価値を付けた商品の開発につながります。消費者の悩み・不安・不満・願望を知り、インサイト(本音)を見つけ、それを解決できる商品・サービスにすればヒットにつながります。


【「Competitor = 競合相手」への目配り】

商品・サービスの開発では、どのマーケットで売るかを決め、そこで売られている同種の商品・サービスを特定し、消費者が選ぶ基準を考えたいうえで、打ち勝つための機能的価値や情緒的価値を付け、差別化することが必要です。この作業は「ポジショニング」と呼ばれます。例えば、栄養価が高いけれども、生産に手間がかかるので価格は高くなるという蜂蜜について、通常の蜂蜜ではなく、健康食品として売り出すこととし、ラベルに効能を詳しく記し、「消費者の満足感」という情緒的価値を高めることができれば、競合商品に打ち勝つ可能性が高まります。



「戦国時代にタイムスリップしたら？」をテーマにした授業を行う石森さん

「石森さんのプロフィール」

アリストテレスの窓	after		JICA Volunteer		before		
	2020	2019	2018	2017	2015	2014	2012 1987
開校 校：2020年5月 事業内容：小・中学生向けのオンライン学習塾を運営 ウェブサイト： 	5月、「アリストテレスの窓」を開校	5月、大手学習塾に入社	4月、スタートアップ企業に入社	6月、帰国	6月、日系社会青年ボランティアとしてブラジルに赴任	4月、日本語教師養成講座の受講を開始	4月、ベンチャー企業に入社 3月、東邦大学理学部を卒業

「自分らしくあり続ける力」を育てる教育を志し、起業による実現を決意。

「海外で暮らすこと」「日系社会」に興味を持ち、参加を決意。

生き生きと暮らすためには、「自分らしくあり続ける力」を持つことが必要ではないだろうか。協力隊経験を通じてそうした問題意識を持つようになった石森さんは、帰国後、この力を育てる学習塾を立ち上げた。

「好奇心」が原動力に

高校時代から石森さんの行動の原動力となってきたのは「好奇心」だ。原因不明の病に罹った経験から「命」に興味を持ち、一度は医者になることを考えた。しかしそれでは飽き足らず、「命」について幅広く学べる東邦大学理学部に進学。入学後は解剖学、病理学、生態学、遺伝子工学など「命」に関して学べる授業は何でも受けた。大学4年生のときには、来日した米国の生態学の研究者と話をしたことで米国の大学に興味を湧き、西海岸にある大学を巡る旅をした。初めての海外経験だった。物のサイズ一つとっても日本とは違う社会は見る物すべてが刺激的で、海外で暮らしたいという思いが芽生えた。

卒業後に就職したのは、イベントの企画・運営や商品開発などを手がけるベンチャー企業。新しい事業を生み出すことへの好奇心から選んだ進路である。担当したのは営業やイ

ベントの運営など。仕事は楽しかったが、やがて「海外で暮らしたい」という思いがよみがえってきた。その手段になると考えたのが、日本語教師の専門性だ。退職して日本語教師養成講座を受講し始めたのは、大学を卒業して2年後のこと。その翌年、「日系社会」という未知だった世界への好奇心から日系社会青年ボランティアに応募し、ブラジルに派遣されることとなった。

配属されたのは、日系団体が運営する小中一貫校。課外授業の1つとなっていた日本語の授業の教員を務めた。ブラジルは人種のもつぱと言われるが、配属先に通う子どもたちのルーツも、ポルトガル、イタリア、ドイツ、日本とさまざまだった。そんなルーツの違いを超えて子どもたちに共通していると感じたのは、「日本の子どもたちより生き生きとしている」ということだ。その要因は、自分らしくを保ちながら生きることができているからだろうと石森さんは考えた。子どもたちは臆せず自分の考えを口にし、しかも彼らが口にする考えには多様性があったからである。

「否定」や「導き」をしない教育

帰国して石森さんが真っ先に感じたのは、

自分らしくあり続ける力の育成

日系社会青年ボランティア／ブラジル・日系日本語学校教師・2015年度派遣

石森和磨さん



協力隊時代の配属先の教員や教え子たち

やはりブラジル人に比べると日本人は生き生きとしているようには見えないということだ。そしてその要因は「自分らしさ」を保つのが難しい社会であるからだとの確信も強まった。帰国直後から学校で協力隊経験について語る出前講座を積極的に引き受けたが、受講した子どもたちに講座の感想を聞くと、「人種が違って仲良くしないといけないと思った」など、大人の顔を伺うような似通った回答ばかりが返ってきたからだ。

「自分らしくあり続ける力」を育てる教育に取り組みたい。そんな思いが強まった石森さんは、大手学習塾の英語講師として働きながら、受講者である日本の小学生の様子を把握した後、2020年5月に独立してオンラインの学び舎「アリストテレスの窓」を立ち上げた。「自分の頭で考える力」と「自分の言葉で伝える力」を育むような授業を行い、それによって子どもたちの「自分らしくあり続ける力」を培うというコンセプトの事業だ。

「授業」を行う点で学習塾の一種とも言えるが、学力向上を直接の目的とはしておらず、中身は独創的である。対象は小学4〜6年生と中学生。小学生は最大6人で集団授業を行う。「戦国時代にタイムスリップしたら?」「生き物によって『命の重さ』に違いはあるのか?」など、毎回さまざまな分野のテーマを設定し、石森さんが問いかけをしながら、子どもたちに議論させる。自身の行動の原動力となってきた「好奇心」をくすぐることで、「自分の頭で考える姿勢」を引き出そうと、テーマの選択には知恵を絞る。一方、中学生は他者との関係性がデリケートな思春期であること踏まえ、石森さんとのマンツーマンの授業を実施。子どもから勉強についての考えや悩みを聞き出しながら、彼ら自身に学習プランを考えさせ、それに沿った授業を進めていく。

授業で石森さんが心がけているのは、子どもたちの発言について「否定も誘導もしない」ことだ。協力隊時代のブラジル人の同僚教員は、子どもたちの発言を否定したり誘導したりはせず、ことあるごとに子どもたちをハグし、存在を認める意思表示をしていた。それをヒントにした手法である。「間違っているも構わない。きみのアイデアが聞きたいのだ」。そんな言葉で発言を促すと、次第に子どもたちの警戒心が解け、自分で考え、それを発信することに慣れていくと言う。

「アリストテレスの窓」の趣旨について、幼稚園や小学校、学習塾などで教職に就いている人たちのなかに賛同者が増えてきている。今後は賛同者と協働しながら、「自分らしくあり続ける力」を育てる教育を国内で広めていくことを石森さんは目指している。

よもぎま話

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、O・B・O・Gに語り合ってもらいます。



Aさん(男性)

【派遣前】
地方自治体の行政職
【協力隊】
▶現職参加
▶・コミュニティ開発
・アジア
・2016年度派遣
▶女性グループの収入向上支援などに従事
【現在】
地方自治体の行政職(復職)

Bさん(女性)

【派遣前】
金融会社の社員
【協力隊】
▶退職参加
▶・コミュニティ開発
・アフリカ
・2016年度派遣
▶農家の収入向上支援などに従事
【現在】
人材紹介会社の社員

Cさん(女性)

【派遣前】
メーカーの社員
【協力隊】
▶退職参加
▶・コミュニティ開発
・アフリカ
・2017年度派遣
▶農産加工品の開発などに従事
【現在】
外資系会社の社員

A 派遣前は地方自治体に行行政職として勤務していました。協力隊は現職参加で、女性グループの収入向上を目的として新たな農作物の栽培を支援する活動に取り組みました。帰国後に復職してから現在まで、環境部門に配属されています。

B 金融会社の営業職を経験した後、退職して協力隊に参加しました。協力隊では、農家の支援として収量を上げるための技術の紹介などに取り組みました。現在は、高い専門性を持つバイリンガルの人を対象とする人材紹介会社に勤務しています。

C メーカーで営業職を務めた後、退職して協力隊に参加しました。私の協力隊活動もやはり農業にかかわるもので、現地の農作物でつくるお菓子などの加工品の開発に取り組みました。現在は外資系の会社に勤務し、建設現場での英語通訳に携わっています。

帰国後の学び

私は協力隊時代、まじめな人ほど、物やお金といった一過性の支援より、仕事の機会を求めていることに気づきました。一方、日本には働き手不足という問題があります。そこで私は、途上国の人が日本で幸せに働ける環境をつくるような仕事に携わりたいと思うようになりました。そうして任期終了後、まずはフランスの大学院で国際人事のマネジメントについて学び、その後半年間、主に途上国から来ている留学生に日本での就職先を紹介する企業でインターンをしました。望んでいたような仕事だったので、そのまま就職したかったのですが、コロナ禍の影響で事業が停滞してしまつたため、やむを得ず現在の勤務先に就職しました。事業の対象には途上国の人がほとんど含まれていないため、フラストレーションを感じてはいるものの、いつか途上国の人の日本でのリクルートにかかわることができるようになったためのために、現在の勤務先でリクルーターとしてのスキルを身につけておこうと考えています。Aさんは環境部門に配属されているということで、協力隊経験とはつながりが薄い仕事をされているのではないかと思うのですが、フラストレーションなどは感じていないのでしょうか。

A いずれは多文化共生社会づくりなど協力隊経験を直接生かすことができる仕事に携わりたいとは思っていますが、地方自治体の行政職はさまざまな部門を異動していくものであることを承知のうえで働いているので、さほどフラストレーションはありません。しかし、現在配属されている部門の仕事に一定程度慣れてきた時期に、協力隊経験を学問的に追究したいと思い、日本の大学院に社会人として入学しました。研究しているのは、先進国で出稼ぎをしている途上国の人の送金が、本国の経済にどのようなインパクトを与えているかに

ついてです。協力隊時代の任地の人の2、3割が海外で出稼ぎをした経験があるというのを知ったことが、このテーマを研究したいと思うようになった発端です。いずれ地域の外国人にかかわるような業務に就くチャンスが訪れたときに、大学院で学んだことが役立つかもしれないとの考えもありましたが、在籍している研究科はアジアの人を中心とする留学生が7割ほどを占めているので、協力隊時代の派遣国とは違う国の人たちのつながりができ、非常に有意義な進学だったと感じています。進学先を選ぶ際は、働きながら履修できるかどうかだけでなく、留学生が多いかどうかも判断基準にしました。Bさんはどのような理由でフランスの大学院を選ばれたのでしょうか。

B 早く実務に就きたいと思っていたので、1年未満で修士号を取れることから選んだのが進学先の大学院でした。

C 私もBさんと同様、通訳の仕事に就く前に通訳の学校で学んでいます。現在の勤務先とは違う所で働きながらの受講で、週に数コマのオンライン授業を受け、最中で2年間で修了できる学校でした。日本は通訳者の資格制度はなく、通訳の学校を修了したところで確実に就職に結びつくわけではないのですが、履歴書のプラスにはなるだろうと考え、入学しました。しかし、通訳の仕事の現場を知らないまま勉強のモチベーションを保ち続けるのは難しいと次第に感じるようになり、学校を修了せずに通訳者として働き始めてしまおうと決め、学校を辞めて現在の勤務先に就職しました。通ったのは1年間ほどでした。通訳者として働き始めて感じるのは、通訳の学校に通ったことはないという通訳者の先輩は多く、技術的には学校に

通う必要はなく、実務経験の蓄積こそが重要であるということでした。ただし、通訳の学校は通訳者を派遣する会社とつながりがあり、私も学校を辞める際にそうした会社を紹介していたので、内定を得たところもあつたので、通訳の仕事のキャリアがない人が最初の一步としての就職口を得るためには、通訳の学校に通うことも有益だと思います。

B 私も大学院で学んだことは、日本で国際人事のマネジメントに携わるうえであまり役立つものではなかつたと感じています。授業で扱っていたのはグローバル社など非常に大きいマルチナショナルな企業の人事であり、得た知識は、日本の多くの企業には適用できそうなないノウハウに関するものばかりだったからです。現在携わっている仕事は、大学院で得た知識がなくてもこなせるものばかりです。ただし、やはり人事に携わつた経験がなかつた私のような者が、その分野に転職するうえでは有益な進学だったと思います。大学院で国際人事のマネジメントを学んでいたことから、留学生の就職支援をする会社でインターンをさせていただくことができ、おそらくその経験があつたからこそ、現在の勤務先に採用してもらえたからです。

今後のビジョン

A 「国際人事のマネジメント」や「通訳」という新たな専門性を帰国後に身につけ、協力隊経験によって目指すようになった進路を開拓されているお2人の話を伺い、組織に依存しない生き方は私にとって真似するのが難しいと感じました。しかし、私のそういう慎重

な性格は、協力隊経験によって少しは変わったという実感があります。2年間という限られた時間しか与えられていないなか、「ためらわずにチャレンジしないと、時間は過ぎていく」との危機感から起こした行動が実を結び、といった経験ができたからです。「働きながら大学院に進学する」という、思っても行動に移せなかつたことが今、できているのも、協力隊経験でチャレンジする姿勢が身についたからだろうと思います。今後も新しいチャレンジを重ね、視野を広げながら、そこで得たものを生かせるような仕事が進んでいくために備えたいと思っています。

B 私は先ほど、途上国の人の人材紹介に携わることができないのでフラストレーションを感じているというお話をしましたが、現在はそれを埋め合わせるため、プライベートで所属しているアートグループで、外国にルーツがある子どもたちと音楽やダンス、演劇などで交流するプログラムを計画しています。今後そのようなことで、仕事とプライベートの両方で協力隊経験が生かせるような道を見つけ出していきたいと考えています。

C 通訳者のニーズは高いので、今後は通訳の専門性を自分の強みにしていきたいと考えています。それがあつたことで、まったく異なる業種にチャレンジしたくなつたときのハードルが下がると思います。また、海外で暮らしたいとなつたときも、仕事の選択肢が広がるのではないかと期待しています。そのため、今後はしばらくは通訳のキャリアを積んで専門性を高めていき、自分が今、取り組むべきだと感じた仕事にいつでもチャレンジできるような状態にしたいと思っています。

千葉県JICA シニアボランティア の会

会の目的

- 会員相互の交流により親睦を図る
- JICAの海外業務に参加した経験をもとに、千葉県におけるJICAの事業活動に協力する
- 千葉県内の国際理解教育・国際交流に関する活動に協力する
- 会員の各種社会参加を促進する情報を提供する
- 上記目的に沿った会員の活動情報の広報に努める



2021年1月に実施した協力隊活動の報告会。ライブでの動画配信も行った

Outline

正式名称	千葉県JICAシニアボランティアの会
設立時期	2003年
法人格	任意団体

Organization

代表者	三輪達雄(シニア海外ボランティア/ ブータン・協同組合・2013年度1次隊)
会員数	78人
入会資格	■ JICA海外協力隊(シニア部門)の経験者/派遣予定者で千葉県出身/在住の人 ■ 上記以外で会の活動に興味がある人も、役員会の審議で入会を許可することがある ■ 会員の配偶者は家族会員として登録可能
会費	2000円/年

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年5月に開催
役員会の頻度	毎月1回開催(臨時開催もあり)
会員・役員間の主な連絡手段	メール・リスト・Web会議・対面会議

Contact

問い合わせ窓口	■ chibajicasv02@gmail.com ■ http://www.chibajicasvob.com ■ https://www.facebook.com/千葉県JICAシニアボランティアの会-318601405679633/ ■ http://www.chibajicasvob.com ■ https://www.facebook.com/千葉県JICAシニアボランティアの会-318601405679633/
情報発信の手段	

主に千葉県在住もしくは出身のJICAシニア海外協力隊員で構成される当会が設立されたのは2003年。活動の中心としてきたのは、地域の国際理解教育の推進だ。その1つは、派遣国の事情や協力隊活動などについて講演をする「出前講座」の実施。依頼主は公民館や小学校などで、20年度はコロナ禍により予定されていた講座が中止となったケースも多かったが、計9件が実現した。

20年度末には、海外の社会・文化に関する幅広い情報をシリーズで伝える自主講座「八街国際理解市民大学」を八街市で開始。同市で国際理解教育に取り組む一般社団法人国際教育交流センター(以下、「センター」との共催である。ブータン

が「幸せの国」と言われる理由の分析など、講演の内容は海外の社会・文化についてのより深い理解を促すものとなっている。21年3月には八街市国際交流協会が設立され、21年度からは同協会が「八街国際理解大学」という名称で講座の主催を引き継ぐことが決定。当会は「センター」と共に委託を受け、引き続き運営を担うこととなった。

「当会では、出前講座の講師だけでなく、広報紙やウェブサイトの制作など、各会員がそれぞれに合った役割を自発的に担う形で運営しています。国際理解の推進に力を入れるという当会の基本方針に賛同する方は、協力隊経験を生かした社会活動を実践するためにぜひ当会をご活用ください」(三輪代表)

新潟県出身または在住の協力隊経験者で構成される当会が設立されたのは1974年。県内で行われるイベントで協力隊について紹介するブースを出展したり、協力隊の説明会「協力隊ナビ」協力隊経験者と語る「」を月に1度のペースで開いたり、地域のみなさんに協力隊について知ってもらうための活動に力を入れてきた。

近年は、JICA東京やJICA新潟デスクと共同で事業を行う機会が増えている。その1つが、地域づくりについて学ぶイベントの開催だ。2020年10月に長岡市で開いたイベント「にいがたまちづくり会議」には、協力隊経験者と一時帰国中の協力隊員、地域おこし協力隊員など約30人が参加。参加者が

それぞれの活動を紹介し合った後、SDGsの考え方を地域づくりにも生かすかを学ぶカードゲーム「SDGs de 地方創生」を行った。このカードゲームは地域づくりについての理解に効果的だと好評だったことから、21年3月には一般市民にこれを体験してもらうイベントを新潟市で開催。今後も同様のイベントを県内各地で開催していく予定だ。

「当会の当面の課題は運営の主体を次世代に引き継ぐことですが、そのためにも、地域づくりの分野などで新たな事業を充実させていきたいと考えています。協力隊の経験を新潟のために生かしたいと思う方には、ぜひ仲間に加わっていただきたいと思えます」(渡部代表)



「環境」と「地球」をテーマにした県内のイベントにブースを出展した当会会員たち(2019年撮影)

新潟県 青年海外協力協会

会の目的

- JICA海外協力隊の経験を生かした地域貢献を行う
- 新潟県内における国際交流や国際理解教育の推進に寄与する

Outline

正式名称	新潟県青年海外協力協会
設立時期	1974年
法人格	任意団体

Organization

代表者	渡部 悟 (ミクロナシア・土木設計・1992年度2次隊)
会員数	約220人
入会資格	新潟県出身/在住のJICA海外協力隊経験者
会費	3000円/年

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年6月に開催
役員会の頻度	不定期
会員・役員間の主な連絡手段	メール・リスト・SNS・Web会議

Contact

問い合わせ窓口	■ watabe_st@kitac.co.jp ■ 090-6959-1859 ■ https://www.facebook.com/JapanOverseasCooperativeAssociationNiigata
情報発信の手段	■ https://www.facebook.com/JapanOverseasCooperativeAssociationNiigata

先輩隊員の シューカツ記

就職先：

十勝バス株式会社

事業概要：路線バス・貸切バスのバス事業、介護事業、学童保育事業、生活支援事業、飲食事業

略歴

- 2012年3月、愛知学院大学を卒業
- 2012年4月～、一般企業で営業職に従事
- 2017年9月、青年海外協力隊員としてタイに赴任
- 2019年9月、帰国
- 2019年11月、十勝バス株式会社に入社

協力隊時代の活動を教えてください



近藤さんが企画・運営した野球大会の出場チーム

タイ野球協会に配属され、タイ北部のチェンマイ県で野球の指導・普及、大会の企画・運営などに取り組みました。

今月の先輩隊員：近藤 薫 さん

こんどう かおる

出身地：岐阜県

職種：野球

生まれた年：1989年

派遣国：タイ

任期終了時年齢：29歳

隊次：2017年度2次隊



現在の所属先：乗合部 乗合課

自家用車以外のあらゆる交通手段のルート検索や予約などが、スマートフォンのアプリによりワンストップでできるサービス「MaaS(Mobility as a Service / マース)」を海外展開するプロジェクトに携わっています。

「十勝バス株式会社」ウェブサイト
▶ <https://www.tokachibus.jp/>

協力隊経験を応募書類にどう表現しましたか？

協力隊経験によって業務を遂行する力がどのように伸びたかを伝えるようにしました。私は協力隊時代、任地で野球大会を企画・運営する際などは、現地のさまざまな機関に出向いて協力者を見つけ、彼らに力を貸してもらいながら、より良い大会になるよう努めました。そうした経験を通じて、人と関係をつくり、協働していく力が培われたことなどを記載しました。

協力隊経験を採用面接でどう表現しましたか？

現在の勤務先が常識にとらわれず新たな事業に挑戦している点が、応募した最大の動機でした。そのため、協力隊経験を通じて社会課題の解決に積極的に挑戦したいと思うようになったこと、それができる職場だと感じて応募したことを率直に伝えました。

現在の仕事のやりがいを教えてください。

私が携わっているプロジェクトは、北海道・十勝で開発・導入したMaaSの技術を、海外の公共交通運営会社などに輸出する事業です。人間の移動は経済に直結するものです。北海道・十勝の小さな取り組みながら、世界の国々と繋がり、その国の経済発展に貢献できるため、大きなビジョンを描きながら仕事ができる点にやりがいを感じています。

今後の抱負をお願いします

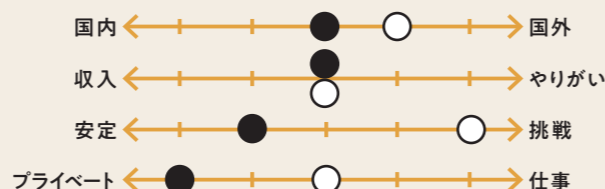
世界で活躍する人材になるため、すべてを学びと捉え、挑戦し、成長しながら、北海道・十勝と世界を繋げる役割を引き続き担っていきたく考えています。

自己分析

強み	■バイタリティ ■感性
弱み	■雑であること
資格	なし

仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前=● 協力隊参加後=○



就活の方針は？

協力隊に参加したことで価値観が変わり、社会課題の解決に積極的に挑戦したいという気持ちが強くなっていました。しかし、求人情報を調べてもそれを実現できそうな会社なかなか見つからなかったため、任期終了後はタイで起業しようと考えた時期もありました。しかし、現在の勤務先が、運輸・交通業者の立場で地域の課題の解決にも取り組んでいることを知り、私の価値観を認めてもらえ、成長できる職場環境だろうと感じたため、求人に応募することにしました。

MESSAGE

協力隊経験により、多くの人は参加前と価値観が変わることと思います。その新たな価値観を自覚し、それに基づいた仕事をしようという志を曲げなければ、必ず自分に向けた会社との出会いを得ることができると思います。

応募…1社
書類審査通過…1社
内定…1社

内定

GOOD WAY!

協力隊時代にどのような人に出会い、どのように価値観が変わったかなど、私の内面のルーツも詳しく伝えたので、私についてより良く理解してもらえたのではないかと思います。

面接

現在の勤務先の面接では「学生時代の野球の経歴」「前職での経歴」「退職して協力隊に参加した理由」「協力隊活動の内容」「語学力」などについて聞かれました。面接でもやはり私についてありのままを伝えるよう心がけました。現在、私に合った職場だと感じていますが、自分のありのままを伝え、その会社に向いているかどうかを評価してもらうことは重要だと思います。

GOOD WAY!

タイのことをどれくらい理解しているかをわかりやすく伝えるようにしたことは、現在の勤務先が海外展開を進めている会社なので、有益だったのではないかと思います。

書類審査

現在の勤務先に提出した書類は履歴書と職務経歴書です。「応募書類はこう書くべきだ」という一般的なノウハウにとらわれず、私のそれまでの経験やその時点の考え方をありのまま表現するようにしました。現在の勤務先は形にとられない会社です。そうした会社に目をとめてもらうには、私のような書き方が良いのではないかと思います。

情報収集

主に民間の採用サイト、知人のタイ人、タイ駐在の日本人から求人情報を集め、就職活動に関する情報やアドバイスを頂きました。思うような求人がなかなか見つからないなか、焦ることなく、周囲の人たちに相談し、採用サイトに掲載されている表向き情報にとられないよう心がけました。その結果、時間はかかりましたが、希望に合う現在の勤務先と出会うことができました。

GOOD WAY!

自分をよく理解してくれている人に相談するのは有益です。協力隊活動に力を貸してくれたタイ駐在の日本人に相談したところ、私の価値観を生かせる仕事についてアドバイスをもらうことができました。

帰国の5カ月前

シューカツ
START

就職!

帰国の2カ月後

帰国の2週間前

帰国の3週間前

帰国の1カ月前



JICA 海外協力隊ウェブサイト「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
▶ https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー/相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。



①北海道ベースボールリーグの初シーズンを戦った「美唄ブラックダイヤモンド」と「富良野ブルーリッジ」の選手たち ②2020年の公式戦の様子

北海道
ベースボールリーグ
理事長

で あいゆう た
出合祐太さん

- ブルキナファン
- 野球
- 2007年度4次隊

北海道初の 野球独立リーグを発足

野球の黎明期にあったブルキナファンでその普及に取り組んだ出合さん。そこで得た「開拓者」としての力を使い、北海道初となる日本の野球独立リーグを立ち上げた。

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

PROFILE ● であい・ゆうた

1983年生まれ、北海道出身。小学生のときから野球を始める。2006年に札幌大学を卒業した後、札幌市内のパン店に就職。08年3月、青年海外協力隊員としてブルキナファンに赴任し、首都で野球の普及に取り組む。10年3月に帰国した後、北海道富良野市のパン店で働くかわら、地元の少年野球チームのコーチを務める。13年、パン店「ブランジェリー・ラファイ」をオープン。そのかわら、17年に北海道ベースボールアカデミー、20年に北海道ベースボールリーグ（QRコード）を設立。



北

北海道初の野球独立リーグ「北海道ベースボールリーグ」が2020年5月に誕生した。2年目となる21年のシーズンは、富良野市、美唄市、士別市、石狩市の4地域を本拠地とする4球団で試合を繰り広げている。その発起人であり、代表を務めるのは、協力隊経験者の出合祐太さんである。

「野球への情熱を持った国内外の選手たちに研鑽の場をつくるのが、発足の目的でした」

北海道ベースボールリーグの各球団は本拠地の人々が運営を担うことを決まりとしており、「選手の育成」と「地域活性化」の両方の機能を果たしている。各球団の本拠地は、いずれも過疎・高齢化の課題を抱えている地域。4球団に所属する約80人の選手たちは、午前中は地元企業や農家などで働いて地域の労働力不足を補いつつ、生活に必要な収入を得て、午後に野球の練習や試合に取り組む。試合の観戦は無料。各球団は地域の企業にスポンサーとなってもらったりして、選手たちの宿舎や練習環境、遠征などの費用をまかなっている。選手たちは一部を除き、「育成枠」であり報酬はない。「野球がうまくなりたい」という選手にとってはチャンスの場であり、地域にとつては地域課題の解決が望める、両者がwin-winの関係になる仕組みとなっている。

選手たちが午前中の仕事で地域の人々との関係を深めると、仕事の関係者たちが自分の子や孫を応援する気分で試合をきっかけに、子どもたちの野球チームを結成した。

指導を続けていると、子どもたちの技術は次第に上達。グラウンドの整備をしたり、礼儀が身についていたり、プレー以外でも成長が見られるようになった。すると、当初は子どもが野球をすることに無関心だった大人たちが、子どもの応援をするようになっていった。

協力隊経験を通じて出合さんが実感したのは、地域で新たな取り組みを立ち上げるためには、まずは果敢に「旗」を立てるのが重要であるということだ。任地の大人たちが野球についてなかなか理解を示さないなか、子どもたちに向けて「野球をやるう」と旗を立てたところ、まずは子どもたちが反応し、続けて大人たちが動き出した。

「人間は、自分がイメージできないことに対して動き出すことはできません。社でゼロから1を生み出すためには、まずは果敢に「先例」をつくって見える化し、人々に具体的なイメージを持ってもらうことが重要なのだと考えるようになりました」

野球を超えた取り組みへ

ブルキナファンの野球少年たちの伸びしろを感じた出合さんは帰国後、富良野市でパン店を営みながら、国内外の野球選手を育成する団体「北海道ベースボールアカデミー」を設立。日本人選手は地域で就労しながら、海外の選手は地域で

見に行くようになる。そうして選手と地域の人々が互いに元気づけ合う関係になることが広まり、また球団がない地域からも続々と球団設立の希望が上がっている。

「北海道ベースボールリーグの仕組みは、誰かが儲かるというものではありません。野球に情熱を持つ若者を過疎・高齢化が進む地域に呼び込み、両者が協力し合う関係を生み出す土俵のようなものです」

まずは「旗」を立てる

出合さんは小学生のときに始めた野球を大学時代まで続けた。仕事で野球に携わることはないだろうと思っていたが、野球の職種で派遣された協力隊員の新聞記事を読み、新たな野球へのかわり方に興味を湧いた。大学を卒業するタイミングでは野球隊員の募集がなかったため、就職。約2年間働いた後、野球隊員としてブルキナファンに派遣されることが叶った。

主な活動は、子どもたちに野球を普及させること。当時、同国では野球についてほとんど知られておらず、ゼロからのスタートだった。そうしたなか、野球に興味を持って近づいてきてくれたのが、現在、野球独立リーグ「四国アイランドリーグplus」の高知ファイティングドッグスの選手として活躍するサンホ・ラシィナさんだった。当時、彼は10歳。出合さんは、野球に興味を示した彼との出会いをボランティア活動しながら、野球の技能を磨くプログラムを運営し始めた。ブルキナファンの選手が日本で技術を磨く機会をつくりたいとの意図もあった。地域での就労やボランティア活動を組み合わせたのは、技術レベルが高くないためにスポンサー収入などは望めないものの、仕事の機会なら提供できるといった地域の人々の声があったからだ。

北海道ベースボールアカデミーの仕組みをもとに、各地でチームを結成してスタートさせたのが北海道ベースボールリーグだ。出合さんは発足に際し、各地域に説明をして回ったが、地域の人々の腰は重かった。そこでまずは「旗」を立てることにした。まだチームが出来ていない段階でリーグ発足を記者会見で宣言。するとまもなく富良野市と美唄市の人々が反応し、球団ができた。その2球団の20年度の動向を見て、21年度はさらに2球団が加わった。出合さんが立てた「旗」は、さらに野球以外の競技へと影響が広がっている。

「スポーツ」と「地域活性化」を組み合わせる北海道ベースボールリーグの取り組みは、北海道で野球以外のスポーツにかかわる方々からも興味を持っていただいている。近々、ほかの競技でも同様のリーグが誕生することが決まっています。ゆくゆくは、「スポーツ」という枠を超えて、「アート」の世界を目指す人など、夢を持つ若者が広く輝ける場をつくる取り組みへと広がっていったらと考えています」

つぶやき

お題 ▶ 寄り道



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

寄り道活動

限られた任期なのだからと、本来の活動以外にたくさんの「寄り道活動」に挑戦した。ガールスカウトに参加したり、少年たちと毎週末、キャッチボールを楽しんだり……。それらが協力隊生活に彩りを添えてくれた。配属先以外のコミュニティとつながったことで、任地の人々をあらためて好きになるきっかけがあったり、運動が苦手だった私が実は体を動かすことが好きなのだと気づけたりしたからだ。

ペンネーム：エリザベティ さん（大洋州・青少年活動・2018年度派遣）

★ main road

「協力隊は人生にとって貴重な寄り道だ」と表現されることがある。しかし、私にとっては「寄り道」どころではない。進学先やその後の目標、今のルームメイトや心の拠り所となる人など、大切なものと引き合わせてくれた人生の「main road」にほかならなかった。これから先も、協力隊経験の思い出とそこで得た貴重なつながりを大事にしながら生き続けていくことだろう。

ペンネーム：Efia / Afi さん
（アフリカ・公衆衛生・2018年度派遣）

★★ 現地語の響き

黄金に輝く寺院、街中を歩く僧侶たち、裸足で外を駆け回る子どもたち、鳴り響くクラクション……。最初は非日常だった通勤路の様子は、徐々に日常になっていった。店に寄り道すると必ず掛けられた現地語の「こんにちば」。その響きを聞くことができなくなってしまったのを、帰国後、寂しく感じた。現地での生活を思い出しては、何か物足りなさを感じる日が続いている。

ペンネーム：Tun Tun さん
（アジア・陸上競技・2018年度派遣）

★★★ 配属先一の情報通?!

配属先には200人以上が在籍。当初は、廊下を歩いている他部署のスタッフから物珍しそうに眺められる毎日だった。彼らのことを知りたかった私は、トイレなどで部屋を出るたびに、他部署の部屋に寄り道しては、「お元気ですか～？ ここは何をしている部署ですか？」と油を売った。するといつしか、所属する部署のスタッフから他部署の状況について尋ねられるようになっていた。

ペンネーム：コルマドY さん
（中南米・障害児・者支援・2018年度派遣）

募集中のお題

「幽霊」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

国際大学がJICA海外協力隊関係者対象の「国際社会起業家プログラム (ISEP)」を新設

国際大学（新潟県南魚沼市）とJICA青年海外協力隊事務局は2020年9月、SDGsの達成などに向けて開発課題の解決を牽引する将来のリーダー・国際人材の育成を目的に、覚書を締結しました。これにもとづき、国際大学は21年9月にJICA海外協力隊関係者（派遣前・派遣中・帰国後のJICA海外協力隊員）のみを対象とする修士課程「国際社会起業家プログラム (ISEP)」を新設します。社会のさまざまな課題をNPOや企業の起業によって解決する人材や、国際機関で活躍する人材の育成を目的とするコースです。入学は9・1・4月で、授業料は90パーセントの免除となります。詳しくは国際大学のウェブサイト (QRコード) でご確認ください。



2020年9月にオンラインで行われた覚書の署名式

JFA、Jリーグ、WEリーグ、JICAの四者がサッカーを通じた国際協力の連携協定を締結

公益財団法人日本サッカー協会 (JFA)、公益社団法人日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)、公益社団法人日本女子プロサッカーリーグ (WEリーグ)、お



2021年6月9日にオンラインで行われた署名式

よびJICAの四者が2021年6月、サッカーを通じた国際協力の一層の発展に向けた連携協定を締結しました。JFA、Jリーグ、JICAの三者は2015年に連携協定を締結しており、JFAの指導者や審判員が協力隊員としてサッカーの選手や指導者、審判員の育成に取り組むなどしてきました。今回、20年6月に設立されたWEリーグが新たに加わった連携協定を締結したことで、四者それぞれの強みを生かしながらサッカーを通じた国際協力を展開し、女性の社会参画の促進をはじめ、社会的・経済的地位や文化、障害の有無などに関係なく誰もが輝ける社会の実現を一層推進します。

JICA海外協力隊 2021年春募集の応募者数

JICA海外協力隊の2021年春募集が6月30日に終了しました。応募者数は、青年海外協力隊・海外協力隊と日系社会青年海外協力隊・日系社会海外協力隊が1245人で、シニア海外協力隊と日系社会シニア海外協力隊が79人でした。今後は8月中に一次選考の結果が発表され、9月中に二次選考、10月に最終的な合否決定が行われる予定です。

大日本蚕糸会のコンクールで 協力隊経験者が会頭賞を受賞

一般財団法人大日本蚕糸会による第9回蚕糸絹業提携確立技術・経営コンクールの表彰式が2021年5月に行われ、協力隊経験者の浅井広太さん（ネパール・村落開発普及員・2012年度3次隊）と妻の香さんが会頭賞を受賞しました。浅井さんは16年に群馬県甘楽郡甘楽町に地域おこし協力隊員として着任し、任期終了後に同町で養蚕業を開始。空き家を活用して養蚕体験ができる交流の場をオープンさせるなど、養蚕業の活性化に取り組んでいます。

クロスロード

令和3年8月号 [第57巻第7号 通巻669号]
発行日 令和3年8月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』は
JICA海外協力隊の
ウェブサイトでも公開
しています。



ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデアも大募集!

今月号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか? ご意見・ご感想をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画のアイデアや、ご紹介いただける情報がございましたら、ぜひお知らせください。

以下のようなアイデア・ 投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活の“失敗談”をお寄せください。
- 派遣国での活動・生活に役立つ“ちょっとした技”をお持ちでしたら、ご紹介ください。
- P34に記載している「お題」で、派遣国での活動・生活のひとコマをつぶやいてみませんか。
- 日本でもつくりことができる派遣国の料理のレシピをお寄せください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



隊員めし

おかわり!

日本でつくる現地の「めし」は活力の源



ザンビアでは、1羽の鶏から「もも」や「むね」など部位ごとに肉をうまく切り分けることができないと、良い妻とは認められず、首都では結婚を控えた女性を親戚の家に出し、主食のシマと鶏肉料理をおいしくつくれるよう花嫁修行をさせます。鶏は腸や顔、首、脚も食べる文化があり、とても経済的です。砂肝は特においしい部位として、夫や客人に優先して分け与えられます。



さばいた鶏の部位を処理するザンビアの女性たち

今月の料理人

まいわありさ
真岩亜里沙さん

(ザンビア・家政・生活改善・2017年度4次隊)

●活動内容：ルサカ州を管轄する行政機関に配属され、地域の母子保健や収入向上の支援に従事。



ザンビアのおもてなし料理 「鶏肉のトマト煮」

材料(2人分)

鶏肉…300g程度(「もも」や「むね」ならブロック1個程度)

トマト…大1個
玉ねぎ…小1/2個
油…適量
塩…適量

つくり方

- 1 鶏肉を茹でる。
- 2 ①をフライパンで色がつくまで揚げ焼き(多めの油で焼くこと)する。
- 3 ②の鶏肉を取り出し、茹で湯を捨てた①の鍋に入れるなどして保温する。
- 4 トマトと玉ねぎを粗みじん切りにする。
- 5 ④を②のフライパンで炒める。野菜の水分と油を乳化させるイメージでソースをつくる。水分が足りないと感じた場合は、少量の水を加える。
- 6 ⑤に塩を振って味付けする。

⑦③を⑥のフライパンに入れて温めれば出来上がり。

ひとくちメモ

ザンビアでもっとも安価な食用肉は鶏肉ですが、1番のおもてなし料理も鶏肉料理です。ブロイラーよりも地鶏が人気で、食堂では同じ料理でもブロイラーか地鶏かで値段も変わります。

日本料理の味付けは醤油と砂糖でなせることが多いですが、ザンビア料理の味付けの基本はトマトと玉ねぎです。鶏肉だけでなく、牛肉ややぎ肉、ウインナーなどもご紹介したレシピと同じように調理します。そのため、トマトと玉ねぎは一年中、安価で流通しています。

現地ではとうもろこし粉でつくる主食のシマ(上写真の右)のほか、副菜として主に青菜が添えられます。青菜は種類により味が異なるため、家庭では同じ青菜を続けず飽きないように献立を工夫するのが基本だそうです。

今月号の表紙 カメルーン



とびわりか
文=飛田梨圭さん
(小学校教育・2018年度1次隊)



私は小学校を巡回し、主に図工授業の質向上支援に取り組みました。絵の具など図工専用の材料や用具を各校で調達するのが難しいなか、現地で手に入る物を活用する工夫が必要でした。写真は、任地でハイビスカスジュースの材料に使われていた花を市場で調達し、それを使って青紫色に染色した切り絵を乾かしている様子です。ほかにチョークの粉なども切り絵や貼り絵の染料として活用しました。

※飛田さんの活動の詳細は16〜17ページで紹介しています。